いつかあの場所で

丹羽遊星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いつかあの場所で

【Ｎコード】
Ｎ４１１４Ｓ

【作者名】
丹羽遊星

【あらすじ】
王弟キイルは、お忍びで訪れた保養地で貴族の娘アズノエルと出会う。
それから六年、十八となったキイルは、王子のいない兄王の後継者として立太子されることとなったが、それに伴い、他国の姫を妃に娶るよう迫られる。
キイルはアズノエルを妻とするべく、別の者を王太子に仕立て上げようと画策するが……。

夢現

午後の陽気は、気だるさと和やかさを織り交ぜている。
定例軍議のために離宮へと向かっていたキイルは、柱廊から望むことのできる庭園へと目を馳せた。そこに彼の心を留め置くものなどなにもない。ただなんとなく、そこから動く気になれなかったのだ。
時折、心を攫っていく虚無……。それは突然舞い降りてきて、いつの間にか過ぎ去っていき、身体中の感覚が塞がれていくような心地を彼に与える。

「いい日和でございますね」

軍議の開始時刻は既に過ぎているというのに、ロベルトはキイルを急かしはしなかった。
キイルが曖昧に相槌を打つと、ロベルトはぽつりぽつりとなにかを話し始めた。彼の言葉にはどこか泡沫(うたかた)の響きが伴っていたが、それを現(うつつ)の世界へと引き戻したのは、涼やかでありながらも雄々しい声であった。

「王弟殿下、ここにいらっしゃったのですか」

背後に立つ長身の男は、アシュレイ・グレンヴィル少将であった。国内屈指の伯爵家の当主であるアシュレイは、彼自身の才腕も相まって、若干二十八ながら少将の階級にまで登りつめている。

「……軍議が始まるのだったな」

遠くを見つめていたキイルは、一呼吸をおいてから言葉を返した。

「はい。皆、アイオーン離宮の“赤の間”に集まっております」

「わかっている」

そう口にしながら、キイルは身を翻した。少しの間をおいて、ロベルトとアシュレイもその後に続いた。

三人は無言のまま離宮への柱廊を進んでいった。途中、中庭の前を通りかかったとき、甲高い声が噴水の近くから響く。

視線を声のほうへ緩慢に向けると、そこには数人の子供の姿がうかがえた。

アシュレイが穏やかな声で呟く。

「ああ、王太子殿下がおられるのですね」

「王太子、か。私はあの王子をそのようにお呼びしたくはないのだが」

ロベルトが苦々しげに応えた。日ごろ嫌味らしい言葉など口にすることのない男が、この件に限っては必ず悪態を吐く。

キイルはいつものことだとロベルトを咎めることはせず、じっと子供たちの様子を見つめていた。そこには王太子ミカヤのほか、それよりもやや年少に見える少年と少女が、煌めく水飛沫の間を行き交っている。

「今日は、貴族の子弟らが来ているのか？」

キイルの問いに、子らのはしゃぐ様子を眺めていたアシュレイが、微笑みながらうなずく。

「お恥ずかしながら私の娘でございます。その隣におられるのがクラウス卿の御子息で、幼いながらしっかりした御子でいらっしゃいますよ」

アシュレイの言葉を聞いたキイルは、わずかに眉をひそめた。なんら他意はないはずのアシュレイの言葉を、キイルは不快に感じてしまった。

あれからもう十年近く経つが、キイルの前でかの一件について話す者はいない。裏へと回れば好き勝手な噂がはこびっているが、キイルは噂などに耳を傾けるつもりもなく、なにを言われようとかまいはしなかった。変に気を遣われるのもまっぴらで、心は頑なに他者の介入を拒み、同情や理解など求めてはいなかった。

……だというのに、あの子の姿を目にしてしまったからだろうか。心は情けないほど乱れていた。自身の心の弱さを突きつけられたようで、その動揺を隠すだけで精一杯であった。

ふとした瞬間に、胸を深く衝くような想いが揺り起こされてしまう。どれほど忘れたふりをしていても、所詮は押し殺していたにすぎないのだと知る。

ロベルトの物言いたげな視線が、キイルの胸をざわつかせた。その視線に耐えかねたように、キイルはもう一度、噴水のほうへ視線を投げる。

あの少年の顔をはっきりと捉えることはできないが、遠目からで

も懐かしい面影を垣間見ることができた。
今、胸の奥に燻るこの想いが愛しさと呼んでいいものなのか、キイルにはわからなかった。

あの当時のことを知る者は多い。だが真実を知る者は少ない。キイル自身、訳のわからぬうちに物事が動いていったのだ。
ただ一つはっきりしているのは、望みの半分は叶ったが、その望みのためにもっとも守りたかったものを失ったということだった……。

柔らかな風が吹く。
キイルは庭園から目をそらし、柱廊を再び歩き始めた。

追憶　―湖畔の少女―　（1）

想いは、いつも過去へと駆け上る。
きっと私たちは、実を結ぶことのない徒花（あだばな）であったのだろう。あのとき、お前に手渡した切り花のように……。

……†……

「キイル殿下、もうすぐ母君の別邸にお着きになりますよ」

デデュー公ミシェルの呼びかけに、キイルは閉じかけていた目を大きく見開いた。

ゴースティン王国首都エクシュールより馬車を走らせること二日、キイルはセヴァンス郡オファンへと到着した。王都とセヴァンスは隣り合っており、馬を早く走らせれば一日で辿り着くことも可能である。キイルがセヴァンスへと出かける際は、昼過ぎに宮殿を出て、その途中に王家が所有する屋敷で一夜を明かし、翌日の昼にかけて母の住むオファンへと向かうことが恒例となっている。

そんな二日間の移動は、広大な宮殿から出ることないキイルにとってたいそうな娯楽であった。窓を開けて馬車を走らせることさえ、王都ではありえない。窮屈な宮廷から抜け出すことへの解放感も相まって、目で見る景色だけでなく、肌で感じる空気までもが彼を楽

しませていた。

キイルが五歳のとき、王太后である母はエクシュール宮殿を去り、セヴァンスのオファンにある別邸へと移り住んだ。それから七年が経つ今も、キイルは年に二度ほど母のご機嫌伺いにとオファンを訪れるようになっている。

その別邸は母の生家であるハーシェリオン家が所有する屋敷の一つで、それほど敷地は大きくないものの、すべてにおいて母好みの趣向が凝らされた空間であった。王宮とは違い、絢爛とした金の装飾や色とりどりの壁画はなく、物々しい胸像は置かれていない。壁も家具も白や淡い色彩を基調としたもので揃えられ、ゆったりとくつろぐことができる造りになっていた。元々はこの屋敷も煌びやかな装飾に囲まれていたそうだが、母が移り住んでから大幅に改装されていったという。

馬車から降り立ったキイルは、左右に立ち並ぶ使用人たちの間を抜け、白亜の階段の前に立つ人物に目を馳せた。そこには青磁(セラドン)色のドレスを身にまとう母キャサリーゼの姿がある。キャサリーゼが顔を綻ばせて出迎えると、キイルは足早に母のもとへ歩み寄った。

「母上、お久しぶうございます」

「ええ、本当にお久しぶりねキイル。あなたからの手紙が届いてから、今日が待ち遠しくて仕方なかったのよ」

キャサリーゼは息子との抱擁を交わした後、キイルの背後に控えるミシェルに微笑を投げかけた。ミシェルは胸に手を当て、深く頭を下げる。

「王太后陛下、本当にお変わりなく安心いたしました」

「ミシェル、そんなに改まらないでちょうだい。ここは王宮ではないのだから」

デデュー公ミシェルは、キャサリーゼの九歳年下の実弟である。ハーシェリオン家当主であるミシェルはキイルの強力な後ろ盾でもあるが、比較的年の近い叔父であるため、キイルにとっては良き相談相手であった。

三人は応接間に入り、猫足の円卓の席に着いた。給仕の者が香り高いお茶を入れ、卓へと運んでいる最中、キイルは思い出したようにキャサリーゼに切り出す。

「母上、兄上からお手紙を預かってきているのです」

「まあ、陛下から？」

キイルは封蝋が押された封筒を取り出し、キャサリーゼの前に差し差した。それを手に取ったキャサリーゼはほうっと息を吐いた。

「なんだか陛下にはお気を遣わせてばかりで申し訳ないわね。私（わたくし）は自分の勝手でこの屋敷に住まおうと考えただけですのに」

今年三十二になるキャサリーゼは、十二年前、義理の息子である第一王子アルト＝ヴィジェの王位継承により王太后となった。

キャサリーゼは先王の二度目の妃であったが、彼女が王妃の位にあったのは十八で王家に嫁ぎ、王が流行り病で急死するまでのわずか二年の間である。親子ほど年の離れた夫には自分よりも年上の継子がおり、さらにその継子に妃も子もいるとくれば、なんのために自分が王妃にと望まれたのかと虚しく思うのも当然であっただろう。

そのせいか、キャサリーゼはキイルの前で父王について語ることはほとんどなかった。あるとすれば、長じるにつれ亡き夫の面差しを色濃く宿すようになった息子に、為政者としての父の素晴らしさを説き聞かせることぐらいであった。

波打つ赤い髪に、少し緑がかった碧眼……。

王宮に飾られた若かりし日の父の肖像は、キイルととてもよく似ていた。

「兄上は、なにも母上を責めておられるわけではありませんよ。母上のことを心配なさって私にその手紙を託されただけなのですから。近ごろ、お身体の調子はよろしいのですか？」

「ええ。無理をしなければ、どうということはないわ」

華奢な茶器を唇から離し、キャサリーゼは微笑んだ。

国内屈指の貴族で、かつてのゴースティン王家でもあるハーシェリオン家の生まれであるキャサリーゼは、息子のキイルの目から見ても華やかな美しさを持つ女性であったが、煌びやかな宮殿を離れ、自然に囲まれたセヴァンスに住むことを選んだことからも、彼女はその容貌ほど華美なものを好む気質ではなかったのだろう。それならば、今彼女がやっと手に入れた平穏は壊してはならぬものだとキイルは思う。

「ところでキイル、あなたはいつまでセヴァンスに滞在するおつもり？　もう十二におなりなのですから、あまり我儘を通すものではありませんよ」

「母上こそ、エクシュール宮へ一度くらいはお戻りになるつもりはないのですか？　叔父上は、母上にお戻りいただきたいようですよ」

「あらミシェル、あなたはキイルに私を説得させるおつもりなの？」
キャサリーゼがミシェルに悪戯っぽく笑ってみせると、ミシェルは慌てたように繕う。
「なにも私は姉上に無理強いをするつもりはございません。ギルベイド家の権勢はこびる宮廷に姉上を止め置きたくはありませんからね。……私が気にしておりますのは、殿下の後見の問題にございます」
ギルベイド家とは兄王の外戚であるが、ハーシェリオン家とともに国内外にその名を馳せる大貴族である。この二つの家は元を辿れば同一族であるにもかかわらず、いずれもがかつてのゴースティン王家の支流に当たる家で、王朝を築き上げた家柄であることから、オトゥール朝が興って五百年が経つ今もなお対立関係にある。
それゆえ、ギルベイド家出身の王妃を母に持つ王が、ハーシェリオン家出身の王太后を追放した、と宮廷では噂されている。王と王太后はなんら対立関係になく、いい加減な噂にすぎないのだが、王が国政に対して自らの権力を振るうことができず、外戚の言いなりになっているのは事実である。ミシェルは今の宮廷の有り様がキイルにとって好ましくないと考えており、王太后としてキャサリーゼに宮廷に留まってほしいと考えていた。
「キイル、あなたには苦労をかけてしまっているのでしょうね」
細い眉を下げ、息子の身を案じる母に、キイルは明るく否定する。
「その心配には及びませんよ。兄上は私のことを弟というよりはまるでご自分の子であるかのような扱いですし、姪の王女方も私の姉のような振舞いをされる。不当な扱いなど受けてはおりません」

「陛下はあなたのこと、お亡くなりになった王子様の代わりのように思っておいでなのでしょうね」

兄王は王太子時代にレイリア王太子妃との間に双子の王女を儲けていた。レイリア妃はその翌年再び身籠ったが、不幸なことに死産となり、折悪しくそれが男児であったという。不幸は重なるもので、その数日後、レイリア妃も亡くなった。兄王の嘆きは並々ならぬものであったと伝え聞く。

「陛下はまだレイリア様をお忘れになれないでいらっしゃるのだわ。あれからもう十二年が経ちますけれど、決して後添いを娶ろうとはされませんもの」

「ですが姉上、それは良いことではありませんか。今のままですとキイル殿下より上位の王位継承権者が現れることはないでしょう。そうなれば殿下は正式に立太子され、次期ゴースティン王となられるのですから」

キイルが誕生してからほどなく、父であるゴースティン王が崩御した。第一王子のアルト＝ヴィジェが二十三で王位を継いだことにより、キイルは生後わずか二か月で王位継承権第一位の王子となった。しかしその地位は、兄王に王子が生まれれば失われるという不安定なものでもあった。実際その可能性が高く、周囲の者もキイルに王位継承者としての期待をかけてなどいなかった。

しかしその状況は、再婚を頑なに拒む兄王の態度により大きく変わりつつある。周囲の思惑は年々肥大しており、キイルに重く圧しかかりつつあったが、それはキャサリーゼも同様であった。

たとえ後添いであっても、王の妃ともなれば己の子を王位につけたがるものであるが、静かな生活を望むキャサリーゼには、幼い息

子を権力闘争に巻き込むことをよしとしなかった。そもそも、ハーシェリオン家がギルベイド家に対抗するかのように先王の妃を輩出させたことを、キャサリーゼ自身が快く思っていないのだ。

「母上、今後私は自由のきかぬ身になるかもしれません。だから今のうちに羽を伸ばしておきたいと考えておりますゆえ、早くエクシュール宮へ戻れなどとおっしゃらないでください」

母の心中を察しているキイルが冗談めかして告げると、キャサリーゼはその想いを受け取るように提案する。

「それなら明日にでも少し遠出をしてきたらいかが？　オファンも美しいけれど、アルティスには叶わないわ」

「母上はいつもそうおっしゃいますね」

「あなたはセヴァンスに来てもこの屋敷にばかりいるからわからないのよ」

「私がこの屋敷にばかりいるのは、ここが一番自由になれる場所だからですよ。私が外を出歩くとなると、近衛の者たちがぞろぞろ付いて来るでしょう？　それが煩わしいのです」

キイルが苦々しく告げると、キャサリーゼは複雑そうに微笑を返した。

母が王妃として過ごした二年間がどのようなものだったのか、キイルには知る由もない。だがキイル自身、宮廷は息苦しいものだと感じることがある。宮廷のしきたりというものは、いちいち回りくどく、少々のことにも二重三重の手間がかかるため、よほど自分の手で事を進めたいと思うことがしばしばである。生まれてこの方ず

っと王宮で暮らしているキイルでさえそう思うのだから、他家から嫁いできた母はなおのことであっただろう。

キイルはちらりと窓のほうを見やる。

ほんの二日前、キイルは自室の部屋から外を眺めていた。それは入れ替わり立ち替わりやってくる教師たちの目を盗んでのことだった。

遠出は煩わしいと口にしつつも、母が美しいと頻りに口にする場所に興味がないわけではなく、温かな光あふれる外の世界にほのかな憧れを抱いていた。

追憶　―湖畔の少女―　（2）

翌日、キイルは朝の十時過ぎにハーシェリオンの屋敷を発ち、アルティスへと向かった。予定ではキャサリーゼも伴っていくはずであったが、昨晩から頭痛が続き、気分がすぐれないということで、キイルはミシェルと二人でハーシェリオン家の馬車へと乗り込んだ。

王都からの旅と同様に、キイルの乗る四頭立て馬車は近衛騎兵たちの行列に取り囲まれている。アルティス訪問はキイルにとってお忍びの遊山であり、彼の素姓を隠す必要があるため、近衛騎兵は従僕に扮している。ただし、大型の馬車に十を超える馬が追走している様は、遠目に見ても大仰な一行であった。

そんな周囲の状況に目を馳せたキイルは、万事がこの調子だなと、そっと苦笑した。

麗らかな春の日差し中をゆるやかに馬車が駆けていくと、目の前には幅の広い石橋が現れた。その川を隔てた先にあるのがアルティスで、周囲の風景は石橋を渡ってから大きく変わっていった。

王都は青銅色の屋根に象牙色の外壁を持つ屋敷が主で、それらが見事なまでに整然と並んでいる。多くの貴族たちが保養に訪れるオファンは自然の多い王都といった風であるが、アルティスには自然が多いことに加えて、家の建て方がまるで異なっていた。岩肌が剥き出しになった崖には、煉瓦（レンガ）色の屋根をした家々が密集して立ち並んでいる。オファンとそれほど距離が離れていないにもかかわらず、アルティスはどこか周囲と隔絶された空気を持つ町で、比較できるほど多くの風景を知らないキイルでさえ異質と感じるほどであった。

「まるで異国に来たようでございましょう？」

ずっと窓の外を見つめているキイルに、ミシェルは可笑しそうに声をかけた。ミシェルは幾度もアルティスを訪れているため、この地の歴史や文化に詳しく、アルティスの中心へ到着するまでの間に様々なことをキイルに聞かせた。

ゴースティン王国を含め、このアレイシス大陸のほぼ全域においてに信仰されているのは、ルドリア神を唯一最高神に据えるルドリア教である。かつて、ルドリア教の司祭たちが王よりも強い権勢を誇った時代があり、その司祭の中でもっとも強い権威を振るったドートリッシュ一族の当主は、次第に＞教皇＜と呼ばれるようになっていった。

教皇による王権への介入は何百年もの間続いたが、三百年ほど前にゴースティン王と教皇の対立が起こり、内乱の末、ルドリア教会において教皇位が廃止された。王権のもとに下ったドートリッシュ家は、ゴースティン王国内の一貴族となったが、教皇の流れを汲む直系子孫たちは＞教皇一族＜と呼ばれ、世俗権力も教会権力も有しないものの、依然として強い畏敬を集める存在であり続けている。

「ああ、そろそろ見えてまいりましたよ」

ミシェルが示す方向には、高い崖の上にそびえ立つ城があった。遠目では判然としないが、白亜の城はなにやら教会堂のような荘厳さをまとっている。

このセヴァンスの地は、かつて教皇領の一つであった。三百年前に一旦王領となった後、ドートリッシュ家の当主へと下賜され、教皇一族がひっそりと暮らすようになった。一族が暮らす城は、かつて教皇の夏の離宮と呼ばれたアルティス城である。城主はエルディスという三十そこそこの若い男で、同族内から妻を娶り、一女を儲

けたが、既に奥方は亡くなっているという。

城のほうへ馬車が進むにつれて、周囲の風景がまた少し変わってくる。見晴らしの良い丘陵地には、見たこともない白い花が一面に咲き乱れていた。

「あの花は？」

「シューゼランでございます。春と秋、一年に二度咲くという珍しいという花でして……」

ミシェルの説明を聞きながらキイルは少しだけ窓から身を乗り出す。シューゼランの敷きつめられた丘の向こうには、遠くの山の麓まで広がる湖があった。

「では、あの湖は？」

「エルド湖でございます」

湖面に光が乱反射し、きらきらと輝いている。アルティスには叶わない、と告げる母の言葉を思い出し、キイルの口元に笑みが浮かんだ。

「止めてくれ。少し一人で歩きたい」

馬車が止まり、恭しく扉が開けられる。馬車を降り立つとともに、あまり遠くへ行かないようにとミシェルが念を押す。そんな呼びかけを受け流しつつ、キイルは草地の上を歩き、湖のほうへと進んでいった。

歩くたびに伸びた草が脚に絡みつく。エクシュール宮の庭園は芝

が均一の長さに刈り取られ、歩行を妨げなどしない。植木も庭師の手によって幾何学模様に刈られている。計算し尽くされたその配置は、バルコニーから見渡せば圧巻の風景であるが、どこか無機質にも感じられる。母の住む別邸にしても、一見、自然のままが残されているようだが、あえて自然の風景を人工的に作り出したものである。今、目の前に広がる手つかずの自然は、何人も踏み荒らすことが許されないような荘厳さが感じられた。

前方には大きな樫の木があり、それより先はゆるやかな下り斜面になって、シューゼランの咲く湖畔が広がっている。さらに歩みを進めたキイルが樫の大木を回り込むと、湖に向かって立っている少女の後ろ姿があった。

「ベルチェ、あなたにしては早かったのね」

そう口にしながら少女が振り返った。

いきなり声をかけられキイルは面食らったが、それ以上に少女は驚いていて、小さな手の中から白い花が零れ落ちていった。

少女は紅潮した頬を両手で押さえて、必死に言葉を紡ぐ。

「ご、ごめんなさい。私(わたくし)ったら、人違いをしてしまって……！」

キイルと年のころは同じぐらいだろうか。

淡い青地に細かなフリルのあしらわれたドレスを身にまとった少女は、腰のあたりまで届く長い亜麻色の髪をそよ風になびかせている。

「こんなころで、なにをしている？」

「久しぶりに外を出歩いてみたかっただけなの。……でも、早く戻

らないといけないのだわ」

キイルは崖の上の城を指差し、少女に問う。

「お前の帰る場所とは、あの城か？」

「ええっ！」

先ほどから少女は驚いた顔ばかりをキイルに見せている。白い肌が紅く染まり、本気で動揺しているようだった。

「ど、どうしておわかりになったの？」

どうしてもなにも、身につけているものを見れば一目瞭然だった。たとえ粗末な衣装であったとしても、身のこなしや言葉遣いで村娘でないことはわかる。

（なにより、この顔……）

ドートリッシュ一族は、王都エクシュールに住む本家をはじめ、国内のいくつかの領地に分家が暮らしているが、そのいずれの者たちもよく似た容貌をしているという。それは血族間による婚姻が多いためで、一千年以上続く家系にもかかわらず、それほど血族が拡散していない。

本家の人間は宮廷に出入りしているため目にする機会も多いが、教皇の一族はアルティス城から出ることは滅多になく、外界とは切り離された存在と認識されている。先ほどミシェルからその話を聞いていたため、このようなところであの一族の者と見（まみ）えることになるなど、キイルは思っていなかった。

「ねえ」

呼びかけられ、キイルがはっと顔を上げると、少女のにこやかな微笑があった。エルド湖と同じ色彩の翡翠の瞳と、それを縁取るけぶるような睫毛が美しい。

「あなた、どこからいらしたの？」

「……オファンだ」

「本当はエクシュールからでしょう？　オファンに来られている貴族様のご子息なのね」

当たりかしら、と言って、少女はくすくすと笑う。

「私の母がオファンで暮らしている。叔父は母にエクシュールに戻ってもらいたいようだが、母にはその気がないらしい」

「あなたは、お母様に戻っていただきたくないの？」

「苦労されることが目に見えているのでな」

キイルが苦笑まじりに呟くと、少女は小さく相槌を打ち、エルド湖へと視線を投げた。

微妙な沈黙に居心地の悪さを感じ、キイルは少女の横顔を見やる。

「……あのね、お父様がもうすぐお亡くなりになるの」

少女が突然呟いたものは、なにやらおかしな言葉だった。聞き間違いではないのかとキイルは耳を疑ったが、少女の暗く沈んだ顔を

見ていると間違いではないようだった。
“お父様”というのはアルティス城主エルディス卿のことだろう。エルディスが病気であるとの話は既に聞き及んでいたが、もうすぐ亡くなるというのはどういうことなのか。

「お父様、ずっとご病気でいらしたのだけれど、ここ数日、お父様から感じる魔力の波動がとても弱まってしまっているの」

少女は腰をかがめ、足元に散らばったシューゼランの花を一輪拾い上げる。

「この花、お父様とお母様の思い出の花なの。小さくてささやかな香りしかしないけれど、一番好きな花だってお父様はおっしゃっていたわ」

「あの城の庭に、この花は咲いていないのか？」

「もちろん咲いているわ。でも、ここに咲いているものでなくではだめなの」

細い弧を描いた眉を寄せ、少女は悲しげに笑む。

「この湖からはね、強い魔力の波動を感じるの。安らかで、穏やかな気持ちにさせてくれるような、そんな波動……。お父様、今とても苦しまれているの。だからこの湖畔に咲いているシューゼランをお届けしたいと思ってここに来たの」

キイルは少女にかける言葉が見つからず、視線を足元に落とした。
少女の手から零れた白い花。病床の父を想い、その手ずから摘み取ったものだったのだ。

「……手伝おう」

キイルは瞬きを繰り返す少女をまっすぐに見つめる。

「私が驚かせてしまったせいで、せっかく摘んだものを駄目にしてしまったのだろう？」

そう告げるとともに、キイルは少し腰をかがめ、足元に咲く花を摘み始めた。五本ほど摘み取ったとき、それを鼻へと近づける。

王宮に咲く花は大輪で、色が濃く、香りも強いものが多い。丹念に生育された花の園は美しく、あたりに芳香を漂わせているが、どこか大仰でもある。

この花の涼やかな甘い香りは、ささやかでありながら深く胸に染みわたるような心地がした。

キイルの左手にはこれ以上持ち切れないほどの花束ができていた。片手いっぱいのシューゼランを、はにかむ少女に手渡そうとしたとき、背後から高い声が聞こえた。

「姫様！」

少女よりもやや年少に見える少年が、息を切らせて走ってくるのが見えた。あまりに急いでいるせいか、草に足を取られ、幾度か転びそうになっている。少年が走ってきた方向に視線を馳せると、そこには赤茶色の二頭立て馬車が止まっていた。遠目にも豪奢な馬車で、あの城から出されたものだとわかる。

「あれがベルチェか？　ずいぶんと小さな下僕がいるのだな」

キイルがからかうように告げると、少女は走るベルチェを微笑ましげに見つめながら呟く。

「あの子、私の弟なのよ」

そう言われて注視してみれば、顔立ちも、髪や瞳の色も少女と同じものだった。しかし従僕のような簡素な衣装を身につけており、姉であるはずのこの少女を“姫様”と呼んだ。

少女のもとへ辿り着いたベルチェは、荒い息を呑み込みながら主人をたしなめる。

「姫様、お一人で出歩かれないでください。皆、どれほど心配いたしましたことか！」

「ごめんなさいね、ベルチェ。すぐに戻るつもりだったのよ」

「それにしても、どうやってこんなところまで来られたのですか！」

「いつも城に出入りしている馬車があるでしょう？　ちょうど街に戻っていくところだったから、それに乗せてもらったのよ」

少女は謝罪しながらベルチェの乱れた髪や服を直してやっていた。弟を労わる少女の素振りは、姪の王女たちの姿をキイルに思い起こさせた。

ベルチェに急かされ、馬車へ向かおうとしていた少女が振り返り、キイルに向かって小さく手を振る。零れんばかりの小さな白い花弁が、少女の手の中でひそやかに揺れていた。

「これ、ありがとう」

キイルはそれに応えようとしたが、少女は微笑みを残したまま優雅に身を翻した。馬車へと乗り込んでいくその姿を、じっと眺めていた。

……†……

「アズノエル様とおっしゃるのですよ」

馬車に戻った途端、ミシェルが満面の笑みで告げた。キイルは思わず眉をひそめたが、ミシェルは気にすることなく少女の素姓を告げる。

「アズノエル＝リネージェ・ディラ・ドートリッシュ……。ご城主エルディス卿のたった一人の姫君でいらっしゃいます」

「弟がいるようだったが？」

「たしかに、あの少年もエルディス卿の御子でしょうが、母君が平民の出であるとかで、ドートリッシュの姓を与えられていないということでございます。なんでも、亡き奥方の意向で城に引き取られたとか……。エルディス卿は御子にドートリッシュの籍をお与えになろうとなさったそうですが、一族の者の強い反対により、使用人として城でお暮らしのようです」

貴族は貴族同士、平民は平民同士でしか婚姻は許されない。また、王族も基本的に王族同士で婚姻を結ぶのが通例であり、父王が国内

の貴族であるギルベイド家とハーシェリオン家から妃を娶ったのは、両家がかつてのゴースティン王家という歴史と権威のある家柄であるからに他ならない。
貴族同士であっても、大貴族による下級貴族への蔑視は並々ならぬものがあり、家格の釣り合わない者同士の婚姻は難しい。貴族の嫡男が身分違いの恋人を囲い、その私生児を引き取る例は稀にあるが、ドートリッシュのような気位の高い一族にそのような醜聞があることは、少々意外なことであった。

キイルが馬車の駆けていった方向に目をやると、城門へと向かっていく赤茶の馬車をわずかに望むことができた。
あの城から見下ろすアルティスの風景は、さぞ素晴らしいことだろう。
馬車に乗り込んだキイルは、近衛騎兵に囲まれながらアルティスを後にした。

追憶　―白い花の約束―　（1）

「そういえば、リリアーナ様がご結婚されるそうよ。キイル、あなたは知っていて？」

夕食の席で、キャサリーゼがキイルにそう切り出した。

リリアーナとは兄王の第一王女で、カレニーナという双子の妹がいる。現在、キイルよりも三つ年上の十五歳であるが、容姿も性格も年齢以上に大人びた姫であった。

「たしか、リオールの王太子とでしたか？　話は聞いていましたが、あれは決定事項だったのですか？」

「陛下からいただいたお手紙にそう書かれていたの。けれど、あまり陛下は乗り気ではないご様子だわ。隣国とはいえ、よほどのことがない限りお会いになることもできませんものね」

一度他国に嫁いだ王女が祖国の地を踏むなどまずありえない。だからこそ兄王は、本来であれば外交の駒である二人の娘たちを他国に嫁がせることに難色を示していた。

ゴースティンはアレイシス大陸においてケーニヒスと肩を並べる大国であり、その王女が嫁ぎ先で粗略に扱われるなどまず考えられないが、軋轢の生じている国に嫁ぐとなればそうもいかない。

その点、リオールはゴースティンにとって属国に近い友好国である。服飾や食事等の文化はゴースティンの影響を色濃く受けており、宮廷における公用語もゴースティン語を用いている。リオールから

嫁いだレイリア妃は宮廷作法の細かさにこそ苦労させられたものの、ゴースティン王家に温かく迎え入れられたという。若くして亡くなったが、夫からは熱烈に愛されて、幸せな結婚であったことだろう。

「レオンハルト王子はレイリア妃の甥で、リリアーナの従兄ですから、理想の結婚相手だと思いますよ。隣国で大国とはいえ、ケーニヒスの王子に嫁がせるよりはよいと兄上も考えられてのことでは？」

「そうね……。陛下は王女様方のことは本当に可愛がっておいでだし、辛い思いなど決してさせたくはないとお考えなのでしょうね。ただ、リリアーナ様が嫁がれたらカレニーナ様はお寂しくなられるわね。とても仲の良い姉妹でらっしゃるもの」

双子の王女たちは快活で朗らかで、ドレスや髪飾り、靴に至るまでお揃いのものを身につけ、時折入れ替わっては廷臣たちをからかっている。そんな年上の姪たちはキイルにとって姉のようであり、姪たちとともに過ごすにつれて兄のことを父のように思うようにもなっていた。ただし、周囲の者の話によれば、父と兄は正反対の気質をしていたらしいが。

「ところでキイル、オファンはどうでしたの？」

キイルはスープを掬っていた手を止め、微笑をキャサリーゼに向ける。

「母上のおっしゃる通り、美しいところでしたよ。たしかにオファンとは雰囲気がまったく違いますね」

「以前ね、アルティス城に伺ったことがあるのよ。エルディス卿と奥方のアディリート様のお招きで」

「奥方は五年ほど前に亡くなられたのでは？」

「ええ。だからそれよりもっと前、私がセヴァンス郡に移ってきてすぐのことよ。ご夫妻は静かなお暮らしでしたけど、お幸せそうでしたわ。あなたと同い年の姫がいらしてね、とても可愛らしかったわ」

それが、今日エルド湖畔で会ったあの少女だ。

いきなりこのような話をするなど、ミシェルがキャサリーゼになにか話したのではないだろうかと、キイルは怪しんだ。

キャサリーゼは不自然に黙り込んだキイルを気にかけることなく、話を続ける。

「オトゥール王家とドートリッシュ家の間には過去の確執があるでしょう？　ですからお会いするまで教皇一族の方々には底の知れない恐ろしさを感じていたのだけれど、ご夫妻はとてもお優しくて、とても感激しましたわ」

「たしか、今から八代前のゴースティン王が時の教皇エルジェ三世を弑(しい)したために、“教皇の呪い”がゴースティンに降りかかったのでしたか？」

どこか愉快気に告げるキイルに、キャサリーゼは口に運ぼうとしたグラスを置き、咎めるように眉を寄せる。

「呪いだなんて、あなたまでそんなこと……」

「もちろん、私はそのようなもの信じておりません。ですが、叔父上はあの偶然を少々本気にしておられるようですね」

オトゥール朝第八代国王の時代、長きにわたり王権に介入し続けた教会権力を排除するため、ゴースティン軍は教皇宮を包囲した。国軍と教皇軍は膠着状態が続いていたが、王の放った刺客がエルジェ三世の首を上げ、ゴースティン王が教皇領であったエクシュールの支配権を手にするに至ったのである。

その内乱の直後、各地で信徒らの暴動が発生し、国中が乱れていたところ、天罰のように起こった飢饉と疫病の蔓延により何万人もの死者を出し、暴動制圧のために軍を率いていた王太子までもが流行り病に倒れた……。

これらの畳みかけるように降りかかった災いは、密かに“教皇の呪い”と呼ばれている。

“教皇の呪い”を恐れたオトゥール王家の者は、ルドリア教会を排斥するのではなく国教として定め、王権のもとで手厚く保護するようになった。王家に関わる祭事が執り行われるガルバンヌ大聖堂は、三百年前より王家が教会に多額の寄進を行い、実に百年の歳月をかけて建築されたものである。

ドートリッシュ一族に関しては、王権の支配下に置きつつも、様々な特権を付与してきた。たとえば教会の権力者として地位の保護しつつ、本家の当主に“セヴァンス侯”を叙爵し、俗人としての権力をも授けた。

現在、ドートリッシュ家の者たちにはかつて王家を意のままに操っていたころのような権柄さはなく、王家に対しても従順であるが、ルドリア教信徒らにとって彼らは依然として強い畏敬の対象である。

特にハーシェリオン家は“教皇の呪い”によって亡くなった王太子の妹が降嫁しているため、ドートリッシュ家に対して恐々とした思いを抱いている。一族には非常に信心深い人間が多く、聖職の道を志す者も後を絶たない。

「胸の内はわかりませんが、表向き、王家と教会は上手くやっているように思います。王家とドートリッシュの確執よりも、よほどギルベイドとハーシェリオンの確執のほうが厄介でしょう？」

宮廷における両家の確執に散々苦しめられてきたキャサリーゼは、その話はしたくないとばかりに曖昧にうなずいた。

……†……

まだ夜が明けぬころ、ふと夢から目覚めたキイルは寝台を抜け出した。先ほどまで見ていた夢は、王宮におけるキイルの日常がつらつらと繰り返されるものであった。決して悪夢ではなかったものの、次々に現れる教師たちや、目の前に積まれた本の山は、彼を酷く疲弊させた。

窓を開けて、バルコニーの手すりに寄りかかる。月は煌々と輝き、夜気は冷たい。手元に時計がないため時間がわからなかったが、夜明けまではまだだいぶあるように思われた。

月明かりの中、人工的に作られた自然の風景を眼下に望む。

――お父様がもうすぐお亡くなりになるの。

鈴の鳴るような声とともに、淡い陰の落ちる小さな顔が思い出された。

――この湖からはね、強い魔力の波動を感じるの。

魔力の波動。
聞き慣れない言葉ではあったが、キイルにとってあの少女の言葉はまったく受け入れがたいものではなかった。

この大陸には、生まれながら魔道の力を操ることのできる人間が稀に存在する。強い魔力を秘めた人間というのは血統によるものが大きいと考えられているが、国内には強い魔力を有する一族がいくつか存在しており、その筆頭がドートリッシュ家である。
教皇位廃止後、ドートリッシュ家は分家の一つに当主の座が移譲されたが、ゴースティン＝ルドリア教会においては依然としてこの一族の強い力を及ぼし続けている。ルドリア教会の司祭は魔道の力を操ることが資格条件とされており、ドートリッシュを始めとした教皇時代に権勢を誇った司祭の子孫たちが教会の多数派となっている。

当然、王宮の祭事や公式礼拝を取りしきる宮廷司祭たちも魔道を操ることができ、キイルは毎日のように司祭たちの操る力を目にしている。ゴースティンの人間は幼いころから魔道の力を身近なものとして受け入れているが、他国においては魔法を扱える人間を見る機会などないのだそうだ。
ミシェルは外務官で、これまでに近隣諸国を何か国も訪問していりため、他国におけるルドリア教会の司祭たちを多く目にしてきている。ミシェルによれば、他国においては司祭たる資格に魔道を操れることが必要とされているわけでもなく、礼拝において魔道の力が用いられることもないらしい。そのため、ゴースティンに留学や外遊に訪れた他国の貴族たちが、教会堂において司祭の力を目にした際、その驚きは並々ならぬものだという。

おそらく、あの少女も強い魔力を秘めた者なのだろう。かの教皇

エルジェ三世はなにやら強力な魔法を操り、司祭だけでなく王侯をも従わせていたと聞くが、晩年に精神を病み、様々な奇行で教会内を混乱に陥れたことから、狂王と揶揄されることもある。
そんな狂王の血を受け継いでいるあの少女から感じたのは、どこまでも清浄で柔らかな空気だった。思い起こすだけで、風のない湖面のような安らかさに包まれていく心地がした。

その三日後。
アルティス城主エルディス・ゴーティエ・ディラ・ドートリッシュの訃報がキイルの耳に届いた。

追憶　―白い花の約束―　（2）

オファンとアルティスの距離はそれほど離れていない。ハーシェリオン別邸からアルティス城までならば、馬車で一時間もかからない。そのため、エルディス卿逝去の報はオファンにもすぐさま拡散していた。

その報を受けた二日後、キイルはキャサリーゼとともにアルティス城で行われるエルディスの葬儀に参列することになった。数日前と同じ道を馬車で駆けている道中、キイルは教皇一族の権威の凄まじさを目の当たりにすることとなった。

セヴァンスの民の嘆きは、まるでこの世の終わりかと言わんばかりである。民らはアルティス城の方角に向かって跪き、涙を流しながら鎮魂の祈りを捧げていた。

王族が他界しようとも、王都の民は泣き崩れたりなどしないだろうとキイルは思う。というのも、三代前のゴースティン王ルイス＝ヴィジェは、無用の戦を隣国に仕掛けた結果、国家財政と人的・物的資源を疲弊させ、追い打ちをかけるように民に重税を課したため、ガルバンヌ大聖堂への葬列には民衆から罵声が浴びせられたという。それを国王直属の近衛兵たちが制しなかったというのだから、宮廷においても王への不満は積もりに積もっていたということだ。

キイルは父王の死をまったく知らない。はたして、父の葬列はどうであったのだろうかと考えているうちに、視線の先には崖の上に高くそびえ立つ城が現れた。

先日は遠くから眺め見ることしか叶わなかったアルティス城へ、

キイルは足を踏み入れた。七百年近く前に教皇の夏の離宮として建てられたこの城は、外観も内部も壮麗な教会のようだったが、若き主を失ったことによる悲愴さが、あふれんばかりの厳かな空気の中に別の色彩を添えていた。

キイルとキャサリーゼは案内されるままに、城内にある礼拝堂へと向かった。重々しい円柱群の身廊を二人は進み、中央よりやや後ろの席に着く。

アルティス城主エルディスは、教皇の末裔というだけで、教会権力は一切有していない。王太后と先王の王子が一貴族の葬儀になど訪れるべきではないのだが、敬虔なルドリア教徒であるキャサリーゼたっての願いにより、この私的な訪問が決行された。そのため、二人は王族としての身分を隠す必要があった。

葬儀の参列者は、セヴァンスに住まう貴族や豪商たちのほか、国内各地で暮らすドートリッシュ一族の者たちであった。分家の者は遠方に住んでいるが、今日の葬儀に参列しているということは、エルディスが危篤状態であることが事前に一族の耳に入っていたのだろう。先日ミシェルから聞き及んでいた通り、祭壇の近くにいる十数人の血族たちは、皆一様に亜麻色の髪を持ち、似たような顔立ちをしている。加えて、強い魔力を秘めているせいか、独特の空気をその身にまとっていた。

壮年の司祭が棺の安置された祭壇へと進む。彼はドートリッシュ本家の当主ユリウスで、ルドリア教会の最高位たる＞主教＜の地位にもある。ユリウスの後ろに控えている黒衣の司祭は、その嫡子クラウスである。

通常、聖職者に婚姻は認められていない。貞潔の誓いも立てるため、子をなすことも許されない。しかし、ドートリッシュ一族の司祭にはその血統維持のために婚姻の可能が特例として認められてい

る。

ユリウスは一族の当主だけがまとうことの許された紫の天鵞絨（ビロード）のローブをまとい、紫水晶の埋め込まれた聖杖を手にしていた。

祭壇の前に立ち、祈りの言葉が唱えられると、眩い光が聖杖から放たれる。

王宮の礼拝堂で見るものと同じ、神聖なる淡い光。神の祝福と信徒らの祈りをつなぐこの光は、決して何人をも傷つけはしない。何年も病床にあったエルディスの臨終は凄まじい苦しみようであったという。死は、やっと彼に与えられた安息であったことだろう。

アズノエルは祭壇にもっとも近い席に着いている。あの儚げだった少女が、少し俯き加減ながらも毅然と立ち、事の成り行きをじっと見守っていた。今日だけは特別に許されているのか、ベルチェはアズノエルの隣に並び、両手を強く組み合わせて祈りを捧げていた。

身廊に落ちる陽光は虹色を帯びていた。高窓にはドートリッシュの紋章である獅子と薔薇を描いたステンドグラスがはめ込まれている。獅子も薔薇も、王家を凌駕する権力を失くしたこの一族には不釣り合いなものであったが、紋章を通して降り注ぐ光は、聖なる力を有する彼らに相応しい荘厳な輝きを放っていた。

葬儀の後、キャサリーゼはユリウスのもとに向かった。ユリウスは先王とキャサリーゼの結婚式を、そして先王の葬儀を執り行った司祭でもあり、王太后であるキャサリーゼはなにかと積もる話もあるのだろう。

その間、キイルは静まり返った城内をうろついていた。柱廊の端まで進み、城壁の外を見下ろしたとき、ゆるやかな坂道を下っていく喪服の少女が目に留まった。供の者もつけずに出歩くのが日常化

しているのだろうかと、キイルが様子をうかがっていると、アズノエルは外に停めてあった簡素な馬車に乗り込んでいった。明らかにこの城の馬車ではなかった。

キイルはアズノエルの後を追いかけようと城を抜け出した。

アズノエルの行き先におおよその見当はついていた。強い魔力の波動が放たれているという、エルド湖だろう。

厩舎で鞍と鐙(あぶみ)のついた馬を一頭借り、城門を飛び出した。エルド湖までは大まかな方向しかわからないが、城から見下ろした先に見えた湖へと己の勘だけを頼りに馬で駆け抜けた。

道なりに進んでいった丘の上から湖畔を望む。そこに黒い人影を見つけ、口元に小さな笑みが浮かんだ。

キイルは馬から降り、後ろ姿へ向かって小走りに駆けていく。その途中、かすかな声音が耳をかすめ、思わず足を止めた。

（歌……？）

水の入ったグラスを弾いたような、透き通った声だった。紡がれる言葉に耳を澄ませてみると、それがゴースティンのものではないことに気づく。おそらく、司祭たちが儀礼の際に使う＞古代語＜であろう。ドートリッシュ一族の者たちは屋敷の中では＞古代語＜で会話をするのだと宮廷司祭より聞き及んだことがある。

突然、歌が止んだ。

キイルが息をひそめて様子をうかがっていると、眩い赤い光がアズノエルから放たれ、赤く染まりゆく天上へと一筋の光が駆け昇っていった。

（あれは、炎の魔法――）

キイルが一歩足を進めようとすると、アズノエルが振り返った。

その顔に涙の跡はない。

「意外だったな」

さらに近づき、口の端を上げる。

「てっきり、泣いているのかと思ったが？」

「もう、充分泣いてしまったから……」

か細い声でアズノエルは呟いた。

既にアディリート夫人も亡くなっている。いくら権威ある一族の娘であったとしても、両親の後ろ盾をなくせば苦労するのは目に見えている。なにより、アルティスという閉ざされた世界の城で、一人で暮らす孤独はいかばかりであろうか。

「これからどうするつもりなんだ？　お前が次代の城主になるのか？」

アズノエルはベールをふわりと揺らすように身を翻す。

「クラウスお兄様がね、エクシュールのお屋敷で一緒に暮さないかって言ってくださっているの」

「お前に兄などいたのか？」

「本当のお兄様ではないの。……叔母様の子供で、私より七つ年上で、とっても優しくて頼りになる方よ」

アズノエルの説明を聞くまでもなく、キイルはクラウスのことを

よく知っていた。
クラウス＝リーゲン・ディラ・ドートリッシュ……。ドートリッシュ本家の嫡男で、彼もまた、ルドリア教会の司祭となっている。加えて宮廷司祭でもあるクラウスは、王宮での公式礼拝を取りしきっており、キイルはほぼ毎日のようにその姿を目にしているのだ。

水鳥が音を立てて空へと飛び立っていった。西から広がりゆく赤は、空の青を徐々に橙へと染め上げていく。

「もう戻られたほうがいいわ。一緒に来られている方が心配なさるでしょう？」

アズノエルの気遣わしげな言葉に、キイルはうなずくことができなかった。
少女のやつれた頬に茜が差していく。今にも崩れそうな微笑を向けられると、とてもこのままここを立ち去ることはできなかった。
思わずキイルは言い募る。

「また、会えないか……？」

髪を煽る風とともに沈黙が訪れたが、ややあって、アズノエルは小さく首を傾げながら薄らと笑みを浮かべる。

「それじゃあ、次は王都で？」

「あ、そうか。そういうことになるんだな……」

キイルのたどたどしい返答が可笑しかったのか、アズノエルはさらに笑みを深くする。

「ねえ、あなたの名前はなんておっしゃるの？」

キイルは瞬時に顔を強張らせた。言わないわけにはいかないと思いつつも、名を告げることを強くためらっていた。

オトゥール王家とドートリッシュ家の何百年にもわたる確執……。アズノエルの直系の先祖であるエルジェ三世を討った子孫がキイルであるのだ。

アズノエルの薄いベールが風に舞い、まっすぐにキイルを見つめる翡翠の瞳が露わになった。

その瞳から目をそらすことができず、キイルはおもむろに口を開く。

「キイル……。キイル＝ヴィジェ・ディラ・オトゥール……」

アズノエルのさっと顔が曇る。黒いベールが彼女の心を表すように揺れ、翻っては、再び白い肌に影を落とした。

「王子様、だったのね」

アズノエルが悲しそうに微笑んだために、キイルは思わず彼女と同じような顔を作ってしまっていた。

いずれわかることだった。オトゥールの家名を名乗らずとも、キイルという名だけで、それが誰なのかわかる者は多い。その容貌にしても、赤い波状毛や細い鼻梁、厚めの下唇といったオトゥール王家の特徴を濃く宿していて、見る者が見れば王家の成員だと一目でわかる。

手を強く握りしめると、人差し指にはめた大きな指輪が食い込み、指間に痛みが走った。その指輪には、王家の紋章である鷲が彫られている。紋章を隠すように、親指で指輪のレリーフをなぞり、深くため息を吐く。

いっそ偽名でも名乗ればよかったのだろうかと逡巡していると、

アズノエルがキイルのほうへ歩を進めてきた。
柔らかな微笑に包まれた顔に、さらさらと亜麻糸のような髪がかかる。それは光に透け、きらきらと輝いていた。
「エクシュール宮殿に行ったら、王子様にお会いできるのかしら？」
キイルの目が大きく見開き、何度も瞬きを繰り返した。拒絶されなかったことで緊張が解け、硬い表情がゆるゆると綻んでいく。
「ああ、クラウスとともに来ればいい」
陽が落ち始め、白い丘は赤く染まっていく。
キイルはシューゼランの花を一輪摘み取り、アズノエルの前に差し出した。
そっと、白い小さな手が伸ばされる。かすかに触れ合ったその指先に、再会の約束が立てられた。

焦燥（1）

ゴースティン王国には、奇妙な王室法がある。

それは、現王の嫡子以外が立太子される場合、“現王に長らく王子が誕生しないこと”という条件を満たさなければならないというものである。この王室法ができたのは百五十年ほど前のことで、その経緯は、既に立太子されていた王弟と庶出の王子との間で王位継承について諍いが起きたことによる。

かの王室法に従い、王弟であるキイルは十八になろうとする今日（こんにち）まで筆頭王位継承権者でありながら正式に立太子されることがなかった。これまで常に不安定な地位に立たされてきたキイルであるが、外戚であるハーシェリオン家の働きかけにより、近々正式に立太子されることが決まっていた。

キイル自身は王座に執着しているわけでなく、むしろ、兄王の外戚であるギルベイド家に対抗しようとするハーシェリオンに心底辟易している面もあった。なにより、身軽な今の生活が阻害されることを不愉快にすら感じていた。

そんなときキイルの耳に飛び込んできたのが、兄王の妾の一人が身籠っているという恒例の醜聞であった。またか、と呆れを通り越して、失笑が漏れるばかりである。

アルト＝ヴィジェ王は、自分の御世における妃の座はレイリアだけだと言わんばかりに、この十八年、周囲の者がどれほど勧めようとも新たな妃を持とうとしなかった。その代わりに数多くの妾を抱え、その妾との間に生まれた私生児は既に三十を超えるとされる。

妾の子らはそのすべてが女子であるが、仮に男子であったとしても、諸外国の王室と同様にゴースティン王家もまた庶子に王位継承権はなく、王の妾遊びがキイルの地位に影響を及ぼすことはない。

それでもキイルは兄王の妾遊びの惨状に、軽蔑するどころか怒りすら抱くようにもなっていた。優秀な閣僚たちが国政を支えているため、王が直接執政せずともさほど問題は生じない。しかし、妃との間に子をなすという王にしかできない責務まで放り投げられては堪らない。

レイリア妃のために貞節を誓うならば、頑なに妃を娶らない理由にも理解を示せたが、これでは亡き妃への裏切りもいいところだろう。それほど潔癖な質ではないキイルであっても、兄王の放蕩ぶりに苛立ちを募らせていく日々であった。

「エイルバードのいない人生だなんて、私(わたくし)、砂糖の入っていない砂糖菓子のようなものだと思うの」

手紙を読んでいたカレニーナがいきなりそう口にした。彼女の手にあるのは、ドレスの仕立ての合間に届けられた婚約者からの恋文である。

「聞いてらっしゃるの、キイル」

「ちゃんと聞いている。砂糖の入っていない砂糖菓子なのだろう？」

キイルがきちんとそのままを復唱すると、カレニーナは満足したように純白の便箋の上に口づけを落とした。キイルはそんなカレニーナの姿を苦笑まじりに見つめ、ため息を呑み込んだ。

姪のカレニーナが結婚することになった。相手は、グレンヴィル伯爵家の若き当主エイルバード＝リオンである。
カレニーナは二十一となる年まで婚約もしておらず、王は娘に結婚させるつもりがないのかと多くの者が思っていたが、王はカレニーナの恋愛結婚をあっさりと認めた。リリアーナ王女が隣国のリオールに嫁いで五年余り経つが、王はいまだに半月に一度の割合でリリアーナ宛ての私書を送っている。リオール宮廷においてゴースティン王の親馬鹿ぶりが嘲弄の的になっているのではないかと懸念されるほどである。
グレンヴィル家は王家に忠実で、大臣や高官、上級将校らを多数輩出している家柄である。外国の王妃となったリリアーナとは違い、今後もカレニーナは宮廷を出入りし、王と会う機会も多いことだろう。手元に置いておきたいという思いから王がエイルバードとの結婚を認めたとしたなら、それほど納得のいく理由もなかった。

年上の姪を姉のように慕っていたキイルにとって、カレニーナの幸せは喜ばしいことであったが、一つ気がかりなことがある。

アズノエルはカレニーナの友人として宮廷に招かれ、カレニーナの開くサロンに出向いたり、小さな音楽祭に参加していた。アズノエルの奏でるハープや、透き通った声で唄い上げるアリアに、宮廷人たちは感嘆を漏らしたものだった。
次第に、アズノエルは宮廷に顔を出す機会が増えていったが、その時間の半分ほどは、表向きカレニーナと過ごしていることになっている。つまり、キイルはカレニーナにアズノエルとの逢瀬の手引きを頼んでいたのだ。
しかし今後はカレニーナを口実に会うことが叶わなくなる。そもそも、昨今キイルが引き受けねばならない政務の数が膨大になっており、自由な時間を取ること自体、難しくもなっていた。

扉が静かに開かれる。
入室してきたアズノエルは薄紅色のタフタ生地のドレスをまとい、長い髪は高く結われ、ゆるやかに巻かれていた。
カレニーナは机上に広げられたいくつもの絹織物に手に取りながら、アズノエルに向けて顔を綻ばせる。

「アズノエル、あなたはどれがいいと思って？」

「カレニーナ様にはそちらの赤いものがお似合いですわ」

「でも、花嫁といったら白でしょう？」

「婚礼の後の祝賀パーティーでのドレスでございましょう？　お式のときだけ白いものをお召しになられればよろしいのですわ」

「それもそうね。ねえ見て、このニードルレースはとても美しいでしょう？　この生地に合わせるのよ」

肘掛け椅子に腰かけていたキイルは、そんな二人の微笑ましいやり取りを、頬杖をついて見つめていた。
普段のカレニーナは朗らかではあるが思慮深く、むやみにはしゃぐ質ではないのだが、式が近いせいか、かつてないほどに浮かれている。そして我儘にもなっている。新たに誂えようとしているドレスにしても、祝賀パーティーで着るもののうちの一つが気に入らないといきなり言い始め、急遽別のものを仕立てることになったのだ。
小鳥のさえずりのような喧騒の中、キイルの視線は、自然とアズノエル一人に向かっていく……。

先日、キイルは王太后のご機嫌伺いのため、数か月ぶりにセヴァンス郡オファンを訪れた。これはもう十年以上にわたり続いている恒例行事で、年々勝手のきかなくなるキイルにとって唯一許されている自由な時間であった。そして、先日のセヴァンス訪問にはまた別の目的があった。

オファンで一夜を明かしたキイルは、ハーシェリオン家の者を言いくるめ、数人の従僕とともにアルティスへと発った。アズノエルは頻繁に王都とセヴァンスを行き来しているが、ちょうど彼女が所用によりアルティス城に滞在していたためである。

『アルティスには、昔から花嫁にこの花を贈る風習があるそうだな』

木陰に腰を下ろしたキイルは、ふと思い出したように呟いた。

城の中庭にはシューゼランが一面に植えられているが、夏はこの花の咲く季節ではないので、青々とした草が茂っているだけである。

『幼いころ、私はなにも知らずにお前にシューゼランを贈ってしまった……。だが、もうすぐ花が咲いたら、私は改めてこの花をお前に贈りたい』

王都北のセヴァンス……。お忍びの貴族たちが集うこの地で二人が出会ったのは、今から六年近く前。彼らが十二になるやならずのころだった。

二人の親交は王都に戻ってからも続き、キイルがアズノエルとの未来を考えるようになるのに数年とかからなかった。もしかしたら、エルド湖畔で摘んだシューゼランを手渡したあのとき、既にそう考えていたのかもしれないとキイルは思う。

陽は落ち始め、ちょうどあの日と同じようにあたりを赤い光が広

がっていた。
遠くの空を眺めていたキイルが視線を斜めにやると、アズノエルの穏やかな笑みがそこにあった。そのまま口づけを落とそうとすると、小さな赤い唇がゆったりと動く。

『私は、殿下のお妃にはなれませんわ』

アズノエルの言葉を耳にしたとき、キイルの喉からは呆けたような声が漏れた。彼女の言葉を信じることができなかった。これまで愛しているとも伴侶にしたいとも殊更に口に出したことはなかったが、自分たちの気持ちは同じであると疑ったことはなかった。

『お前は、私の気持ちがわかっているものと思っていたが？』

『ええ。ですから、いつかはお別れせねばならないと思っておりました』

『ふざけるな』

キイルが鋭利な声を放っても、アズノエルは穏やかな表情を崩さない。

『なぜだ？』

『私は、ドートリッシュの娘ですから』

『王家に匹敵するような権威のある家の娘であっても、王族の妃に相応しくないと？』

『もし私が殿下のお妃に相応しい者ならば、周囲の者が私を妃候補

に挙げていらっしゃるはず……。ですが、そのようなことは決してありえないことでございましょう？　私などを妃になさっても、殿下にとって有益どころか不利益にしかならないではありませんか』

アズノエルの声は重々しく、キイルの反論を制するような空気を孕んでいたが、彼女の言葉に強い反発を抱くのは止められなかった。己にとって最愛の者を娶ることのなにが不利益であるというのだろうか。

キイルは思わずアズノエルを睨みつけていたが、アズノエルはその強い視線を受け流すように柔い笑みを零す。

『今、殿下にはいくつもの縁談がございましょう？　その方々があなたに相応しい方です』

『では、お前の相手として許されるのは誰だというのだ？　同じ一族の者か？』

『たしかに、そうすることを望んでいる者もおります。ですが、私は誰とも結婚をするつもりはございませんから』

キイルを絶句させるようなことを言っておきながら、アズノエルは笑みを絶やさない。澄んだ声で思い出を紡ぐ。

『私、初めて殿下にお会いしたときのこと、よく思い出しますの。そしてエクシュール宮殿でお会いしたときのことも……』

王都に移り住んだアズノエルは、しばしばクラウスとともにエクシュール宮へと出向いてくるようになった。ある日、キイルが礼拝堂の前を通りかかった際、クラウスの傍らに彼女がいた。

クラウスを介して紹介された少女は、キイルに向けて、初めてお

目にかかります、と告げた。アズノエルの悪戯っぽい目が愛らしくて、思わず顔が綻んだ。

あのときのことはキイルも忘れてなどいない。

『初めてお会いしたときからずっと、私は殿下のことをお慕い申しておりました。ですが、結ばれることのない相手だとずっと言い聞かせてきたのです。心が期待してしまわないように、いつかあなたを諦められるようにと――』

キイルはアズノエルの肩を抱いて強く引き寄せた。それ以上、痛々しい拒絶の言葉を聞きたくなかった……。

カレニーナと談笑していたアズノエルは、キイルの視線に気づいたのか、そっと目を伏せた。

机上に整然と並べられた宝飾品が、午後の陽光によりさらなる輝きを放っている。カレニーナはその一つ一つを手に取り、鏡の前で耳や首元に当てては、アズノエルの意見を聞いていた。

キイルはおもむろに立ち上がり、はしゃぐ二人のほうへと歩みを進める。このままアズノエルをどこかへ連れ出し、曖昧な言葉の真意を聞き出したかった。

これまでキイルはアズノエルに狂おしいほどの恋情を覚えたことはない。心を共有し、共に在ることができればそれでよかったのだ。それが叶わなくなると思ったことを境に、彼女への執着は一気に増したように思えた。

憮然としたまま近づくキイルに、アズノエルの驚いたように目を見開いたが、その視線もすぐにそらされる。かすかに苛立ちを覚えたキイルがアズノエルの腕を掴もうとしたまさにそのとき、再び部

屋の扉が開かれた。

「楽しそうだな、カレニーナ。廊下にまでお前の声が響いておったぞ」

「まあ、お父様ったら」

艶然とした笑みを湛えたアルト＝ヴィジェ王がカレニーナに歩み寄った。その後方には、純白の仕着せの王直属の侍従らが控えている。

兄王は、金糸の刺繍がふんだんに施された煌びやかな長上着（ジュストコール）と、それに揃いの中衣（ヴェスト）を身につけ、長身をさらに際立たせるため、踵の高い赤い靴を履いている。オトゥール王家の象徴である波打つ赤い髪は、背のあたりまで長く伸ばされ、深苔色のリボンで結わえられていた。

王とはいえ、四十ともなれば落ち着いた装いをするものだが、兄王には老いによる衰えがまったく見られず、艶めいた色香をまとう壮年の男には、軽薄なほどの華やかな意匠がよく似合った。

王とカレニーナは、アズノエルを巻き込んで談笑を始める。すぐ近くにいるキイルは三人の話に加わらず、募る苛立ちを噛みしめていた。そのとき、まだ開かれたままの扉から、キイルの秘書官であるロベルト・ネイゲルが入室してきた。

ロベルトは王に一礼した後、恭しくキイルの前で頭を下げる。

「キイル殿下、デデュー公が先日の閣議報告をなさりたいとのことでございます。どうぞ、アイオーン離宮へお戻りを……」

キイルは思わず顔をしかめた。

ミシェルには、カレニーナのもとを訪れる際には最低でも二時間は声をかけるなと厳命していたのだ。だが、先日キイルがアルティスにお忍びで訪れていたために、処理せねばならない政務が平時よりも滞っているのは事実である。

なにより、この部屋にはカレニーナだけではなく、兄王と王の侍従がひしめいているため、アズノエルと二人きりの時間など作りようもない。最近はいつもこうなのだ。アズノエルとの静かな逢瀬を望もうにも、キイルの周囲は騒がしくなるばかりである。

鬱積を抱えながら、キイルはカレニーナの私室を後にした。

焦燥（2）

キイルが王都を離れていた間、定例の軍議が開かれていた。その議事録といくつかの報告書をロベルトより手渡されたキイルは、急ぎ目を通していく。

「また、シベリーの暴動が発生したのだな……」

キイルは忌々しいとばかりに報告書を机上に投げ置いた。

シベリーというのはゴースティン王国の西に帯状に広がる国家で、大国ケーニヒスの属国でもある。ケーニヒスはシベリーを対ゴースティン国境防衛軍として組織化しているため、ゴースティンとシベリーの間では争いが絶えない。ケーニヒスより精度の高い小銃や砲が出回るようになってからは年々やっかいな存在となっている。

キイルは苛立ちまじりに告げる。

「いっそ、奴らを潰すというのも手か？」

「ですが殿下、それではケーニヒスと戦争になりかねません」

「わかっている」

国境守備を拡大すべきなのだろう。今しばらくはそれで手を打つしかない。

手っ取り早いのはシベリーの宗主国であるケーニヒスと同盟を結ぶことであるが、六十年前にゴースティンとケーニヒス間で起こった戦争以来、両国の関係は冷え切っており、同盟を望むことは難しい。ちょうどカレニーナと年の釣り合う王子がケーニヒスにはいるが、兄王はケーニヒスの王族になど決してカレニーナを嫁がせはし

ない。兄王は国益よりも私欲を優先する人間なのである。キイルとしても、あれほど幸せそうにしているカレニーナを政治の駒として使うことには抵抗があった。

ケーニヒスとの不和の根源にあるのは、不要の戦を仕掛けた三代前のルイス＝ヴィジェ王である。キイルは己の先祖ながらルイス王に恨み事を言ってやりたい気分であった。葬列に罵声を浴びせた民衆の気持ちもよくわかるというものだ。

なにやら視線を感じてキイルが顔を上げると、そこには心底嬉しそうにキイルを見つめるロベルトの顔があった。

「……どうしたのだ？」

「いよいよキイル殿下が王太子となられるのでございますね。あのような王室法のために殿下がこれまで肩身の狭い思いをされていたのかと思うと、まったくもって腹立たしいことでございます」

キイルは曖昧な相槌を打った。

ハーシェリオン一門の者が、キイルを王座につけることをどれほど強く望んできたか、キイルは知らないわけではない。それを煩わしく思うこともあったが、政務に関わるようになるにつれて、それが自分に与えられた当然の義務であると受け入れるようになっていた。

私情で義務を投げ出すなど恥ずべきことと思いながらも、割り切れない想いが今の彼にはある。

「ロベルト。もし私が王になどなりたくないと言えば、お前はどうする？」

薄茶の瞳を瞬かせたロベルトは、声を立てて笑い始めた。

「それは、一体なんの冗談でございますか？」

まったくもって冗談にしか聞こえないことだろう。

ロベルトはキイルが十歳のときに宛がわれた三つ年上の学友である。彼は王立学院の神童として名を馳せており、大学教授らの推薦により、大貴族の子弟たちとともに宮廷に召された。それほど良い家柄ではないものの、優れた知性と深い忠誠心を有しており、キイルにとってはもっとも信頼のおける臣下であり友人でもあった。

キイルはあえてロベルトに問う。

「ならば、私がただの王弟であれば、お前が私に仕える価値はないということか？」

「決してそのような……。私はただ殿下ほどゴースティンの王に相応しい方はいらっしゃらないと――！」

「もうよい、少しからかっただけだ」

長年の友人であるロベルトであっても、キイルの真意を図ることはできないのだ。すべてを話せば、この生真面目な男は呆れ返るに違いない。

キイルが苦笑を漏らすと、ロベルトは怪訝に眉をひそめる。

「デデュー公は、殿下が正式にアルト＝ヴィジェ陛下の後継となられるよう、準備を進められておいでなのでございましょう？　なにかご不満がおありなのですか？」

「いや、それが不満というわけでなく……」

そのとき、扉の外からキイルを離宮に呼び戻した男の声が届いた。キイルが憮然としたまま入室許可を与えると、ミシェルは柔和な笑みを湛えたまま執務机の前まで歩み寄った。それと同時にロベルトが一礼をし、執務室を退室していった。

ミシェルは執務机の上に散らばった報告書や議事録にちらと目を落とし、キイルへにこやかに笑いかける。

「お待たせいたしました。軍事の話はそれまでにしていただいて、本題に入らせていただきます」

「また、あの話か。次から次へと、よくも飽きぬことだ」

キイルはミシェルに毒づきながらも、ため息を押し殺した。

ミシェルが机上に並べられていく資料は政務に関わるものではない。目をそむけたくなるような内容の請願書の束のほうがマシだと思える代物である。もっとも、じきにキイルへ与えられる地位を考慮すれば、まったく政務と無関係とすることができない。

異質な王室法はここでも影響を及ぼしていた。

一国の王太子ともなれば、ほんの子供のころに婚約者が決まり、婚姻が可能な年齢に達すればただちに式を挙げるのが通例である。しかし王太子ではないキイルには、幾人かの婚約者候補はいたものの、正式に定められることはなかった。

アルト＝ヴィジェ王が頑なに再婚を拒んでいるのは諸外国でも有名であるが、他国の外務官たちも、まさかそれが十八年も継続するとは思っていなかったことだろう。少なくとも五年ほど前までは、ゴースティン宮廷においても王はいずれ再婚するものと思われていたのだ。国王の従弟であるダラス公アンジェなど、いまだ熱心に新たな妃候補を王に勧めているほどである。アンジェは、レイリア妃

の容貌の特徴を持つ者を選び抜いては、王に引き合わせている。そのようなことをしては逆効果ではないのかとキイルには思えるが、ギルベイド家当主たるアンジェには王の継嗣がなんとしてでも必要なのだ。

ギルベイド一門の者たちが王の再婚に熱心な姿勢を貫いている以上、キイルの妃となっても王太子妃となれない可能性が依然としてある。もちろんゴースティン王族に嫁ぐということだけでも大変な誉れであり、王家の傍系一族となることを考えれば、たとえ王弟妃であってもその地位は外交上、魅力的に映ることだろう。

それでも他国が二の足を踏んでいたのは、かつてのゴースティン王族であるギルベイド家とハーシェリオン家の宮廷闘争に巻き込まれることを懸念しているためである。何十年にもわたり続いてきたこの争いが大使を通じて諸外国の宮廷にも知れ渡っており、キイルの妃候補については正式に立太子されるまでは静観するつもりのようだった。

しかしこの半年ほど、キイルの周囲はそれまでの静けさを覆すほどに騒がしい。

キイルが思案に耽っている間もミシェルは延々と花嫁候補についての話を続けている。

「私としましては、ファジール大公女ルイーザ様が殿下のお相手には望ましいと考えております。ファジール大公はケーニヒス王女を母君に持つ由緒正しいお血筋……。あちらのご意向としましても、殿下ならば望むべくもないとのことでございました」

以前から幾度も耳にしてきた名前であったが、まったく覚える気にならない。贈られた肖像画を目にしたこともあったが、興味の持てない人間の顔などすぐに忘れてしまう。キイルの頭を巡るのは、

いかに叔父の勧める縁談を回避するかということだけであった。

「ファジール大公の娘、か……」

ファジール大公国はケーニヒスの構成国であるが、その領土はケーニヒス全土の三分の一を占め、大公家はケーニヒス王家の傍系一族である。ケーニヒスには年の見合う王女は分家筋を含めてもおらず、国益を最優先に考えるのならばファジール大公の娘ほど次期ゴースティン王に相応しい相手はいない。

国益につながる相手ならば、美醜も人柄も二の次となる。正しい血筋と国益がゴースティン王妃に求められている条件であり、ましてや愛や恋など歯牙にかける必要もないものである。

亡き妃を熱愛し続けた兄王の場合が異例であっただけだが、カレニーナまでも臣下と恋愛結婚を果たそうとしている今、キイルには欲が出てしまう。

「気が進まんな」

「ですが、そろそろ真剣にお考えいただきませんと。再来月には十八歳におなりなのですから」

兄王がレイリア妃と結婚したのが十九のときであった。王族に限らず貴族男子の半数程度が二十歳前後で妻を娶る。ロベルトも二年前に結婚し、今では娘が一人いる。

王族である以上、私情を優先させることは許されないが、キイルはこれまで自らの責務を放棄したり、私情を押し通したことなどない。むしろ、兄王が王の責務を放り出したがために、キイルは王弟として十代前半から政務を任されてきたのだ。それが王族として当然の役割であると甘受してきたが、ひたすら愛と欲望に生きようと

する兄を前にすれば、自分の妻となる相手を選ぶ自由ぐらい当然あってしかるべきだと思うようになっていた。

「……叔父上、私には妃にしたいと考えている娘が既にいるのだ」

ミシェルは弾かれたようにキイルを見つめる。

「この国の貴族の娘だ。誰かはまだ言えぬが」

「それゆえに、どの縁談をお勧めしても難色を示されていたのですか……」

キイルは先ほどとは一転して、無邪気に笑って見せる。

「そういうことだ。だからあなたに協力を頼みたい」

「しかし殿下、相手が誰か言えぬというのは、貴族といえども著しく家格が低いということでしょうか？」

「いや、むしろ王家に匹敵する家柄だ」

「まさか、ギルベイド家の娘――」

「それならば、叔父上には頼まぬ。直接ダラス公にでも話すさ」

「……ドートリッシュでございますか？」

キイルが微笑を浮かべると、ミシェルの顔が曇る。

「そ、それは……ギルベイドの娘を王妃に望むよりも難しいかと」

「なぜだ？　たかが侯爵家だろう？」

「たかが侯爵家などと！　あの家には王家が与えた称号など意味がありません！」

ミシェルは声を荒げた。彼の言い放った言葉には、強い私情が込められているようにキイルには感じられた。

ギルベイド家とハーシェリオン家、この二つの家にはオトゥール家がゴースティン王家となって後、王より公爵位が叙爵されているが、オトゥール家よりも長い歴史と伝統を持つがゆえに、王より与えられた称号になど意味はないと両家の者は考えている。王家に従順で野心などないように見えるミシェルですら、デデュー公爵の称号よりもハーシェリオン家当主としての地位に価値があると思っているのだ。

ミシェルは咳払いを一つし、努めて冷静な声でキイルに問いかける。

「クラウス殿の従妹、アズノエル姫でございましょう？　亡きエルディス卿の、たった一人の姫君……」

「ああ」

「そういえば、幼いころにセヴァンスでお会いになられておりましたね。殿下は姉上のところによく行かれておりますが、もしやそのときにも……」

「ああ、オファンへ行くついでにアルティスにも滞在したことがあ

る。だが、王太子となれば、そのような自由はきかなくなるだろう？　だから彼女のことを正式に公表したい。無論、私の妃として」

ミシェルは額に手のひらを当て、渋面を作る。

「あの者は教皇の一族ではありませんか。それも、あのエルジェ三世の直系筋……。教会権力を抑え込むどころか、増長させかねません」

「協力はできぬと？」

「恐れながら、とても国益につながるお相手ではございません。もちろん、殿下がアズノエル姫をそれほどまで愛しておいでなら、なにも今後一切会うなとまでは申しません。ただし、ルイーザ大公女と婚姻は結んでいただいた上でのことになりますが」

「なにが言いたい？」

「なにも妃とせずともよいではありませんか」

「叔父上……。あなたは私に、兄上のように妾を持てと言うつもりなのか？」

ミシェルは口を噤んだままであったが、決して否定はしなかった。むしろ、子供の駄々に呆れているというような目をしていた。

「……下がれ」

ミシェルはそれ以上なにも言わず、一礼の後、身を翻した。退室していくミシェルの背に、キイルは鋭利な声を投げつける。

「デデュー公、ここでの話、決して他言はするな」

一人になったキイルは、唇を噛みながら自問を繰り返した。
それほどに難しい相手なのか。自分だけがわかっていなかったのか。少なくとも、アズノエルは諦めているようだった。
ふと、初めてキイルが素姓を明かしたときのアズノエルの顔が思い出された。落胆したような、寂しげな微笑……。

――初めてお会いしたときから、私は殿下のことをお慕い申しておりました。けれど、結ばれることのない相手だとずっと言い聞かせてきたのです。

子供のときと同じようなアズノエルの顔が過ぎり、キイルは机の上に無造作に置かれていた書類を強く握りしめていた。

焦燥　（2）（後書き）

【補足説明】

キイルは王弟であるため、王太子ではなく王太弟と呼ぶのが正確だそうです。

（立太子という言葉も立太弟となるのでしょうか？）

ですが、混乱を避けるためにあえて“王太子”という言葉で統一しています。

“東宮”“ドーファン”“ツェサレーヴィチ”のように推定相続人に共通する称号を作るという方法もありましたが、それはそれでややこしくなりそうなのでやめました。

ご了承ください。

儚い希望

「これはキイル殿下……。どうされたのですか？」

ふらりと本宮の礼拝堂を訪れたキイルを、長い黒髪の司祭が出迎えた。

ロジェ・サルファ。ルドリア教会においてドートリッシュと双璧をなすとされるサルファ家の当主である。

かつてドートリッシュの当主が＞教皇＜とされていた時代、サルファの一族は＞大司教＜の地位にある者を数多く輩出し、教皇のもっとも忠実なる臣下でもあった。だからこそ、ゴースティン王はサルファ家にもドートリッシュ家に準じる特権の付与を許した。教会内においても、彼らは高位に就く者が多く、信徒からの畏敬を集める一族である。

しかし今ではドートリッシュ家とサルファ家は不和であり、このロジェとクラウスの仲も芳しいものではないという。

キイルはロジェをちらと見やり、ため息まじりに呟く。

「ドートリッシュやサルファは特殊な一族なのであろうな。聖職者でありながら、妻帯も子をなすことも許されておるのだから」

「たしかに特権とも言えるものですが、それが許されているからには義務や柵（しがらみ）もございます。王家も、私どもと同じであると存じますが？」

「それは嫌味か？　その義務を放棄し特権に溺れているのが、この国の王ではないか」

「なにを焦っておいでなのです？」

ロジェの穏やかな声が耳にまとわりついてくる。キイルはそれほど信心深いわけではないが、聖職者の持つ独特の空気に呑み込まれそうになる自分に気づいた。

ふと、本音を漏らす。

「私は、王にならねばならぬのか……？」

「アルト＝ヴィジェ陛下に、王子がいらっしゃいませんので、現状ではキイル殿下に王位が渡ることになりましょう。あの王室法に基づいて立太子される以上、たとえ陛下に王子がお生まれになるようなことがあっても、あなたの地位が揺らぐことはございません」

少々の慰めを期待しての問いかけだったが、ロジェはキイルに容赦なく現状を叩きつけた。

慰めなど期待するだけ無駄であったと思い直し、身を翻そうとしたキイルに、ロジェは静かに問いかける。

「殿下はご存じですか？　かの王室法をギルベイド家の者が制定した経緯について……」

「そのぐらい知っている。図々しい妾が、正嫡の王子を排斥し、己の庶出の子を王太子に据えたからだろう」

キイルが苦々しく吐き捨てると、ロジェは微笑を返す。

「今の状況は、そのときと似ておりますね」

「なんだと？」

「もし、アルト＝ヴィジェ陛下に男子がお産まれになれば、殿下を取り巻く状況は変わるかもしれないということでございます。それがたとえ妾の子であったとしても……」

なるほど、と得心しながらも、キイルの胸の底からは暗い感情が沸き上がる。

「そのようなもの……奇跡、というよりも絶望に近いな。信じてみるだけ、強い落胆を味わうだけではないか。第一、そなたも知っているだろう？　兄上に女子しか生まれないのは、次から次へと捨てられていく妾たちの呪いであると噂されていることを。どうせ、今度生まれるという妾の子もまた女だろう」

「いずれにしても、あなたは王となるべきお方でございます。様々なことにお迷いになるのは結構です。しかしながら、最終的に選ばれる道は決して間違ってはなりません。……それは許されぬことです」

キイルは眉を寄せた。一体、誰がそれを許さぬというのだと、抑えがたい苛立ちに火が灯った。

薄笑みを湛えたままの司祭に一瞥をくれ、キイルはそのまま礼拝堂を後にした。

かの王室法の一文が制定された経緯は、今から五代前の王の御世

に遡る。
オトゥール朝第十一代国王リシャールには他国から迎えた妃がいたが、十人生まれた子のうち九人は王女で、たった一人の王子も夭折していた。妃は度重なる出産により病がちとなっており、さらなる子は望めないことから、王の異母弟リュシャンが王太子とされていた。
そんな中、王は多くの妾をはべらせ、幾人かの私生児を儲けるに至っていた。特に、男子を産んでいたギルベイド分家の娘は、妾でありながらまるで妃のごとく振舞っていた。王は、妾とその子イーヴを王宮に住まわせ、周囲の反対を押し切ってイーヴを認知までしていた。妃が亡くなってから、その妾はイーヴを王子として扱うよう周囲に強要するようにもなっていた。

その数年後に王は病で崩御したが、王が臨終の際にその妾を後添いとすることに決め、宮廷司祭の立会いのもと婚姻証明書にまで署名していた。それにより、その妾は過去に遡って亡き王の妃となり、庶子イーヴには王子の身分が与えられることとなった。

それでもなお、王弟リュシャンが王位に就くのが筋であったが、結果として王位が渡ったのは五歳にもならないイーヴで、リュシャンは立太子されていたにもかかわらず廃位された。
その背景にはいくつかの要因があった。
まず、王弟の母后はケーニヒスに取り込まれた小国の王女で、ゴースティンと母后の祖国はケーニヒスとの絡みで関係が悪化していたことである。加えてリュシャンが病弱であることも相まって、彼の立場は非常に弱いものとなっていた。さらに、当時の閣僚や高官の多くがギルベイド家に連なる大貴族で占められ、一門の権勢はかつてないほどに強まっており、後ろ盾の弱い王弟を表立って庇える者がいなかったのだ。

とはいえ、あまりに品位を欠くこの王位継承問題は、廷臣はおろか民の反発をも招いた。王の寵を笠に着て、好き勝手に振舞い、贅沢三昧を繰り返したその妾の評判もまた地に落ちていた。
それゆえ、ひとまず場を収めようとして制定されたのがあの王室法であった。

元より、王弟と第一王子の間で王位継承に関する諍いが起こりやすいという歴史もあり、“現王に長らく王子が誕生しない”限り、王弟を正式に王太子と扱うことはできなくなった。そして、一度正式に立太子された王子は、後に上位の王位継承権が現れてもその地位は覆されないということも同時に規定された。

もっとも、道理を曲げてまで即位させられた幼王イーヴはわずか十歳で崩御し、廃太子と呼ばれたリュシャンがその跡を継いで第十三代国王となった。つまり、キイルにはギルベイドの血脈は流れていない。そして現在、あの王室法はギルベイド家の者たちの首を絞めることになっていた。

……†……

翌日、キイルは側近に依頼していた報告書に目を通していたが、読み終わるとともにその書類を机上に放った。
ロジェ・サルファの言うように、たしかに状況は似ている。妾の子であったとしても、その妾を兄王の妃にさえすれば、その子が自動的に王太子となるのだ。
しかしたった一つだけ、まったく異なることがある。それは決定

的な差異であると言ってもいい。

王の妾アイリーン・オルストン。

兄王と接する機会があるということは、せめて高位の官職に就いている貴族の娘だろうとキイルは考えていたが、それはまったくの逆であった。

いかんせん家格が低すぎる。それは下級貴族の中にあってもなお下位に当たるような家の娘であった。名を聞いたとき、すぐに気づくべきであったのだろう。キイルは、オルストンという家名を一度として耳にしたことはなかったのだから。

アルト＝ヴィジェ王は以前、とある男爵夫人を妾にしていた。アイリーン・オルストンとは、その男爵夫人の侍女で、兄は妾の侍女に手を出したということになる。改めて、兄の女性の好みの広範囲さには驚かされるばかりであった。

妾の地位が著しく低いことは問題である。これでは、たとえ男子が誕生したとしても、その母を新たな王妃に据えるという計画自体が成り立たなくなる。百五十年前の王太子廃位劇は、妾上がりの妃の生家がギルベイドであったからこそ為せた暴挙であるのだ。

ゴースティン王の妻となり肩身の狭い思いをした妃は多いが、それはあくまで国家間の軋轢によるものであり、家格の低さゆえに冷遇された妃などいない。もしアイリーンを妃にと望むのであれば、ダラス公を始めとしたギルベイド家の者たちに賭けるしかないということだ。ハーシェリオン家の流れを組む王など誕生させないという彼らの執念に……。

だが、はたして彼らが動いてくれるだろうか。

（私の真意を明かした上で、協力を仰ぐというのもひとつの手だ。いや、それでは不審感を煽るだけであろうか……）

そこまで思って、キイルは馬鹿らしいとばかりに笑みを浮かべる。
この十八年間、妾との間に男子が生まれたことはない。三十を超える私生児がいながら、ただの一度としてないのだ。
奇跡としか言いようのないものに縋ろうとしている自分が滑稽でしかなかった。

（いっそ、私が王であればよかったのだ……）

先王であるキイルの父ヴィクトルは、ケーニヒス王女を妃にと望む周囲の反対を押し切り、ギルベイド家の娘オヴェリアを妃に据えた。
キイルが王となった暁に、父と同じように、アズノエルを妃に据えることもできなくはない。しかし、兄王は壮健そのものであり、キイルが王位に就くなど何十年先になるかわからない。それまで独身を貫き通すなど許されないだろう。今でさえ、これほどせっつかれているのだ。

加えて、アズノエル自身が妃になることを拒否している。教皇一族としての生まれた柵（しがらみ）は、目に見えない形で彼女を縛りつけているのだろう。
せめて彼女がクラウスの妹であれば、ミシェルもあれほど強く反対しなかっただろう。ドートリッシュ本家の者は教皇の直系でないこともあり、王家に従順で、忠実な臣下であると言っても過言ではない。
そんな甲斐のないことばかりを願うにつれて、キイルは自身を愚かしく、情けなく思いもした。

（もう、なにもかも遅すぎるのではないのだろうか……）

キイルは投げ放った報告書を手元に引き寄せる。口の中で兄王の

妾の名を呟き、ため息を吐きながら瞳を閉じた。

彼に残された道は、儚い希望に縋ることだけであった。

神が、弱き者に与えたもう奇跡を信じて……。

幼き愛の形

「オファンへ？」

請願書に目を通していたキイルは、ミシェルの満面の笑顔を見上げた。

「はい、王太后陛下の別邸にて大規模な夜会が開かれることになっているのですが、ぜひ、殿下にもご出席していただきたいと思いまして」

ミシェルからの申し出は急なものであったが、これは毎年のことと言ってもよかった。しばし考え込んだものの、キイルは一つ返事で了承した。

アイリーン・オルストンの子が生まれるまで、協力者もいないキイルにはろくに行動を起こせない。しばらくは政務に没頭するほかは時間を有効に潰す方法がなかったのだ。

キイルは羽ペンを取り、カレニーナ宛ての手紙を書いた。カレニーナのもとを訪れているであろうアズノエルに、急遽セヴァンスへ行くことになった旨を伝えるためである。数時間後に届いたアズノエルの返事は、近日中にアルティスへと向かうというものであった。

（一体、私たちはいつまでこのようなことを続けていくのだろうか）

今、アズノエルは王宮にいる。近くにいるというのに会い行くこともできない。逢瀬を約束した場所は、王都から一日以上かかるア

ルティスだ。
家柄の良い女性ほど、未婚のうちは恋人を持つべきではないという考えがこの国には根強い。キイルは自分たちの想いが後ろ暗いものであるような扱いをされることが気に入らず、アズノエルとの関係を正式に公表したいと考えている。しかし、今はまだそれは叶わない。

二つ折りの白いカードをじっと眺める。アズノエルが返信のために寄こしたカードには、簡潔な文面が流麗な文字で書かれていた。せめてささやかな愛の言葉が添えてあれば、キイルの心持ちも多少は変わったことだろう。しかしアズノエルは誰かの目に触れることを恐れてか、必要最低限の言葉しか文面に表さなかった。

キイルは今、一日が過ぎるのを遅く感じながらも、一日が過ぎていくのを強く恐れている。アズノエルに会いたいとだけ願い、手にしたカードへそっと口づけた。

……†……

セヴァンスは避暑地としてよく知られているが、中でもこのオファンは王太后が居住しているために、多くの宮廷貴族たちが集う社交場となっており、保養シーズンともなれば、毎晩のように夜会が開かれている。それゆえ、王太后の暮らすこのオファンの別邸は、諸外国でも密かに有名であった。
夜会の始まる前、引き会わせたい者がいるとのことで、ミシェルはキイルを控えの間へと連れていった。その部屋の中央には、四十

代の中ほどに見える黒髪の男がいた。堂々とした体躯に青灰色の礼装をまとい、余裕のある笑みを湛えてキャサリーゼと言葉を交わしている。

「ファルス伯爵、よくいらっしゃった」

「デデュー公爵、お会いするのは一年ぶりだな。お変わりなくて安心いたした」

ミシェルが親しげに話す男は、外国の伯爵のようだった。ミシェルはキイルのほうへ手を指し示し、にこやかに紹介する。

「先王の第二王子、キイル＝ヴィジェ殿下にございます」

「おお、王太子殿下にお会いできるとは……。あなた様の肖像を幾度か拝見したことがございますが、父君のヴィクトル陛下の若かりしお姿に生き映しであると思っておりました」

「伯爵は、父と面識がおありか？」

「ええ、先王陛下とはもう三十年も前になりますが、エクシュール宮殿にてお目にかかったことがございます」

オファンを訪れる貴族は国内外問わず名のある者たちばかりだが、キイルはファルスという名を耳にしたことはない。おそらくは偽名だろう。オファンでは高貴な者が身分を隠すために偽名を用いたり、鬘（かつら）で変装したりする例が珍しくないのだ。

その意味ではキイルも素性を隠してよかったのだが、ここに集まる者たちは国内外の要人ばかりである。親交を築いておくためにわざわざ出向いたのだから、王族としての地位は最大限利用するに限

るだろう。
　そう思っていた矢先、キイルのほうへ歩み寄ってきたミシェルがファルス伯爵の素姓を告げる。
「あの方の本当のお名前は、カール＝フィオラ・ディル・ザイードとおっしゃるのです」
「あれが、ファジールのカール大公……！」
「お忍びで外遊しておられるのですよ」
　ミシェルはキイルの耳元でそう囁いた。
「叔父上……」
　思わず、呆れ声がキイルから漏れた。妃候補に上がっていたルイーザ大公女の件が真っ先につながったためである。
　カール大公は先代ファジール大公とケーニヒス王女との間に生まれた。ケーニヒスはゴースティンと違い、女系男子の王位継承権を認めているため、カールは第二位のケーニヒス王位継承権を有している。
　近年、ケーニヒス国内の不協和音は頻繁に耳にする。元々ファジール地方は独立した国家であり、ケーニヒスと同君連合が形成されて百数十年が経つ今でも、ファジールはケーニヒスからの独立を図っているというのが外交筋の見解である。この状況においてゴースティンと堅密な関係を築こうとするのは当然であろう。
　キャサリーゼと談笑しているカール大公に視線を戻すと、それに気づいたカールはキイルに軽く目礼した。

一見、低頭に思えるものの野心に燃える男の瞳だった。それはミシェルとも通じるものがある。きっと彼らは、単に利害だけでなく、互いに通ずるものがあるからこそ親交が深いのだろう。

王となろうとなるまいと、キイルは国政を担う者として祖国の益について考えねばならない立場である。ミシェルはそれをわからせるために、キイルをここへ連れてきたのだろうか。

ここしばらくのキイルの振舞いは子供が自棄を起こしているようにも見え、それをミシェルは懸念していたのかもしれない。キイルは冷静さ失いつつあった自分を恥じ、今夜は自らに与えられた責務を果たそうと思った。

ハーシェリオン別邸での夜会は午後六時から始まった。

キイルは事前に主要な招待客についてミシェルから聞き及んでいたが、ミシェルの口から、キイルが会いたくないと思っている人物の名は出てこなかった。キイルはそれにより安心し切っており、顔なじみの招待客らに声をかけ、愛想を振りまいていた。

そんな中、流麗な所作でお辞儀する女性にキイルは瞠目する。初めて会う人物であったが、それが誰なのかキイルは一目で気づくことができた。

その女性の身につけているドレスは、ケーニヒス流のものである。ゴースティン宮廷で見られるものとほぼ同じ作りであるものの、赤や黒、金といった重厚な色が多く使われており、フリルも少なく、堅苦しい印象を与える意匠である。ファジールはケーニヒスの影響が強いため、ほぼすべての文化がケーニヒスのもので揃えられているのだ。

「カール大公の娘、ルイーザにございます。以後、お見知りおきを」
ちらと見ただけの肖像画の中の少女が、鮮明によみがえってきたかのようであった。
キイルは落胆から込み上げてくる乾いた笑いをなんとか呑み込む。
「……あなたは、偽名を使われぬのか？」
ルイーザは面食らったように黒い瞳を瞬かせたが、すぐに艶然と笑む。
「ええ、偽名だなんてすぐにボロが出てしまいそうですもの。父のように上手く使い分けるだなんて、私には無理ですわ」
普通はそうだろう、とキイルは苦笑する。
ルイーザが来ていることをキイルが知れば、この夜会から逃げるとでもミシェルは思ったのだろうか。そのようなことができるはずもないのだから、事前に知らせておいてくれればよいのにと、叔父を恨めしく思った。
二人の会話が途切れたころ、楽団が新たな曲を奏で始める。王宮の夜会では必ずと言っていいほど演奏される定番のワルツだった。
「王太子様、一曲お相手いただけませんかしら？」
「ええ、もちろん」
誘いには素直に受けた。というよりも、通常、キイルから誘わなければならないものであった。ルイーザ大公女がこの夜会に出席しているのは、キイルと引き合わせるためのものだったのだから。
差し出されたルイーザの手を厳かに取り、キイルは中央へと進み

出た。
変に期待をされても困るが、かといって無下にあしらうことなどできはしない。相手はファジールの大公女である。
キイルは微笑を浮かべ、穏やかな口調で問う。
「ルイーザ殿、ゴースティンにお来しになるのは初めてでいらっしゃるのか？」
「ええ。父はあの通りですけれど、私はファジールの領土内から出ることさえ今までございませんでした。オファンは美しいところですのね。貴族たちがお忍びで集うというのもわかりますわ」
「たしかにオファンも美しいが、アルティスには叶わぬ」
「存じておりますわ。ここに来る途中に立ち寄りましたの。特に、崖の上にそびえ立つあの白亜のお城の素晴らしいこと……。殿下はアルティスにはよく行かれますの？」
「そうだな。あそこは幼いころの思い出の地だ」
二人の婚約話が進んでいることを知っている招待客たちは、好奇に満ちた視線を向けてくる。曲が終わると同時に、キイルは周囲の目から逃れるようにルイーザを伴ってテラスへと出た。
手すりにもたれるキイルの背に、ルイーゼのおもねるような声が届く。
「王太子様はいつまでこちらにいらっしゃるの？」
「今週中には王都へ戻るつもりだ」

「政務がお忙しくてらっしゃるのね。父が言っておりましたわ。キイル殿下は政務のすべてを取り仕切っておられると」

「すべて、というわけではないが、私にしかこなせぬ政務もある。それゆえに忙しいのだ。たとえば、私にとってはこの夜会も政務の一部に過ぎぬ」

あなたもそうだろう、とキイルが笑いかけると、ルイーザは顔色を変えた。

「……ずいぶんと、冷たいことをおっしゃるのね」

傷ついた、という風ではなく、どこか安堵したようにルイーザは呟いた。

泣かれでもすれば、言葉を取り繕いもしただろうが、そんなものは不要の気遣いだったようだ。あの父に、この娘あり、と言ったところだろう。ルイーザの立ち位置を知ったキイルは、清々しさを覚えた。

ルイーザは少し顎を上げてキイルを見る。

「私がオファンまで出向いてきたのはあなたにお会いするためですわ。けれど、あなたは私になど興味がおありではないようですのね」

「どうやら、叔父があなたの父君になにか余計なことを言ったようだな」

ミシェルはこの夜会のために、お忍びの外遊を好むカール大公だけでなく、箱入りの大公女までを巻き込んだ。ここまでやるからに

は、ミシェルも相当焦っているということなのだ。それほどアズノエルのことが気に入らないのかと思うと、キイルの胸の奥にじわじわと苛立ちが沸き起こってくる。

「ルイーザ殿、あなたはゴースティンの王妃になりたいのか？　それとも私の妻に？」

「その二つに違いなどございますの？　まさか、恋愛感情の有無だなんておっしゃるのかしら？」

「そうだと言えば？」

「あなたには王族である資格などないと思うだけですわ」

キイルは手すりから身を乗り出すようにして笑った。先ほど感じた苛立ちもどこかに吹き飛んでいた。深い敬意と多くの称賛に包まれて育ったキイルには、姪の王女たちにでさえ、ここまで辛辣な物言いをされたことはなかったのだ。

いつまでも笑い続けるキイルの様子に気を悪くしたのか、ルイーザは細い眉を吊り上げ、声をとがらせる。

「私は、今夜初めてあなたにお会いして、あなたのことは好きでも嫌いでもありません。ただ、結婚相手としては他の誰よりも魅力的だというだけです。……我がファジール大公国にとってあなたほどの有益なお相手などおりませんから」

その反応に、キイルはますますルイーザを好ましく思った。国家のための結婚に対し、ここまで割り切ることができる彼女が羨ましかった。同時に、ルイーザの言うように自分には王族たる資格も覚悟もないのだろうという気にもなっていた。

「殿下には恋人がいらっしゃると伺っておりますわ。それが少々厄介なお相手であることも」

「ああ。私は彼女以外を妃に据えるつもりがないのだが、周囲の反対に遭い、困り果てている。ここ最近は、いっそ臣籍に下ることができればと願うばかりの日々なのだ」

「あなたは間違っておられますわ。王族というものは、その生き死にすら個人のものではなく、ただ、国の繁栄のためだけに血肉を捧げるべき存在よ。それにもかかわらず、愛だの恋だのにかまけて、義務を投げ出されるというの？　もし王族同士の結婚にも恋愛感情を抱く必要があるというのならば、それは国益につながる相手との間に抱くべきものだと私は考えますわ」

「……残念だな」

怒りに燃えるルイーザの瞳を見つめ、キイルは苦笑を漏らす。

「私がもっと早くにあなたと出会っていれば、あなたを愛することができたかもしれぬ。あなたは、そのような感情など必要ないと考えているかもしれぬが……」

身体を反転させ、手すりに背を預ける。

「さっきの質問だが、私の真意はこうだ。……私は王になるつもりはない。あなたがゴースティン王妃の地位をお望みなら、私との結婚は回避されたほうがよい」

「あの、おっしゃっている意味が……」

「私はまだ王太子ではない。あなたはそれをご存じか？」

ルイーザは弾かれたように目を見開く。

「ゴースティンには少々変わった王室法がある。それにより、王弟である私はまだ立太子されていない。私は宮廷において、“王太子”ではなく“筆頭王位継承権者”という持って回った呼び方をされている」

「ですけど、それでもあなたが王位を継がれるのは確実ではないの？　だって、先王陛下には他に王子がいらっしゃらないし、アルト＝ヴィジェ陛下にだって王女しかいらっしゃらないわ」

「ああ、もう少しで私が王太子となるのは確実になるだろう。……何事もなければな」

「な、なにをなさるおつもりなの？」

「まだなにもする気はない。今しばらくは信じてみるだけだ」

キイルは夏の星座が輝く夜空を見つめ、祈るように呟く。

「……奇跡を」

賭け

細い指に操られた炎が淡い輝きを放ち、夜空へと吸い込まれていく。

それは、柔らかな夢の心地に似ている。

「美しいな」

「えっ……？」

「お前の操る炎だ。私が火などを賛美する気になるのは、お前が生み出すものだからだろう」

アズノエルは螺旋状に浮かび上がる炎を消し、はにかんだ笑みを見せて俯いた。その様子を、キイルは微笑ましげに見つめる。

「魔道の力は、神と人とをつなぐ精霊の力をお借りしているもの……。ですから、あまり不用意に使ってはいけないのです。もし、このようなところをクラウスお兄様に見られたら叱られてしまいますわ」

二年前にドートリッシュ本家の当主の座に就いたクラウスは、現在ルドリア教会最高位の主教となっている。彼は国王の信任厚く、若くして宮廷司祭長の地位にもある。

キイルはエクシュール宮でクラウスと昔からよく顔を合わせるが、実直という言葉があれほど似合う者はいないだろうと思っている。

少々堅苦しさを覚える男ではあるが、そういった生真面目さはアズノエルを思わせるもので、好意的に思っていた。

キイルは立ち上がろうとするアズノエルの手を掴み、いきおいよく引き寄せた。顎に指をかけ、素早く唇を合わせる。

「魔道の力を使っているところよりも、こうしているところを見られるほうが叱られるのではないのか？」

アズノエルの手がわずかにキイルの肩を押したが、彼女の形ばかりの抵抗にはもう慣れていた。儚い抵抗を、花弁を摘み取るように崩していく。

夜のアルティス城はあまりに静かだ。

アズノエルが王都へと移り住んでから、この城には必要最低限の使用人しか置かれていない。二人がいるテラスはアズノエルの私室につながっており、ここには許可なく誰も入ることはできない。

そのせいで、二人の逢瀬は日毎に大胆になっていく。それに伴い、彼らの間に漂う退廃の匂いは日々濃くなっていたが、堕落への道を留めているのはアズノエルの慎み深さのせいであった。

アズノエルは六年前にエクシュールの本邸で暮らすようになり、クラウスに付いて宮廷を出入りしているものの、なにも夜会や観劇にばかり興じているわけでもない。カレニーナの誘いでサロンに出入りするほかは宮廷に出向くこともほとんどなく、余暇はドートリッシュの寄付により立てられた救貧院や病院を訪れ、病人の世話をしたり、子らに本を読み聞かせたりしている。頻繁にアルティスに来ている理由も同様であった。

「知っているか？　兄上の妾がもうすぐ子を産むらしい」

ふいにキイルはそう切り出した。既にその話を聞き及んでいたためか、アズノエルは特に驚きはしなかった。

「どうせまた女だろうがな。妾との間に何十人もの子が生まれはしたが、そのすべてが女ばかり……。王位継承権を持たぬ男子が生まれたところで私にはなんの関係もないのだが、あまりに女ばかりが生まれるせいで、次々に捨てられていく妾の呪いだなどと言われている。実際、兄上の放蕩ぶりに神がお怒りなのやもしれぬ。……私も、あの方には少々怒りを感じている」

ろくに神に敬意を払っていないくせにこのようなことを口にする自分が可笑しくて、キイルからは自然と笑いが込み上げていった。それをアズノエルが咎める。

「陛下は慈悲深くお優しい方です。そのようなことを申されてはいけませんわ」

「ああ、私にとっても良い兄だ。王でさえなければ、私はあの方に悪意を抱くことはなかったであろうな。王には向かぬとご自分で言っておられたが、いっそ、楽師にでもなられればよいのだ。兄上もそのほうが本望だろう」

「よくベルージャを奏でていらっしゃいますね。私もいくつか楽器を嗜んでおりますが、あのような音は出せませんわ」

「なにを言う。お前のハープは見事なものだ。多くの者が、あの音色に聴き惚れている」

キイルはアズノエルを腕の中に納めたまま、ぼんやりと夜空を見上げる。

彼の胸には不安ばかりが募っていた。もしかしたら、今こうして彼女を抱いていることさえも夢幻ではないのかという正体の知れぬ恐れに……。

「ここでお前と暮らせればどれほどよいかといつも思う」

腕に力を込め、アズノエルの耳元でささやく。

「私が王となれば、この城に似せた新しい離宮を造ろう。庭園も、お前が気に入るように造り変えよう。そうだな、エルド湖畔のシューゼランを庭に移植させようか」

腕の中のアズノエルはなにも言葉を返さない。身体を離し、キイルはアズノエルの顔をのぞき込んでみたが、瞳は固く閉じられていた。あのような戯言を口にしてみても、アズノエルを困らせるだけのことで、また、キイル自身も虚しさが募るばかりであった。

懇願するように問う。

「もし兄上に王子がおられれば、つまり、私が臣籍に下ることが容易であれば、私の妻になることを望んでくれたか？」

「……叶わぬ願いとわかっていても、そう望んでしまったと思います」

そう呟いたアズノエルは、キイルの服の袖をきゅっと握った。その仕草があまりに愛おしく、華奢な肩を掴む手に力がこもった。

薄闇の中、キイルは密かに口角を上げる。

「ならば、私と賭けをしないか？」

キイルはアズノエルの手を取り、その滑らかな甲に唇を這わせる。
「もし、もうすぐ生まれる妾の子が男子なら、私はその子に王籍を与え、王太子とすべく尽力しよう。そうすれば私は臣籍に下り、お前を娶ることが――」
キイルが言い終わるのを待たず、アズノエルは彼の手を強く払った。
「そのようなお戯れを！　あなたはご自分の立場をわかっていらっしゃるのですか！」
キイルは低く笑いながら彼女の手を引き戻す。
「もし生まれたのが女なら、私には他に取りうる手がなくなるのだ。私は別に王になどなりたいわけではない。ましてや、お前を失ってまで得たい地位ではない。近ごろ周囲の者が妃を娶れと煩く責め立ててくる。私はお前以外を伴侶とする気はないというのに……」
現王の実弟と国内屈指の名家の娘……。その二つの肩書は決して不釣り合いなものでないはずなのだ。三百年近くも昔の禍根を引きずり、その子孫である者たちが引き裂かれねばならないなど馬鹿げている。
それゆえ、王妃でなければよいのだろうと、キイルはアズノエルに問いかけたが、彼女の返事は色好いものではなかった。
「そのようなもの、賭けでもなんでもありませんわ」
「私が次期王の地位にある限り、お前は私の妻にはなってくれないのだろう？　だが、私はお前を妾などにする気はない。もしお前が

望むのならば、私は王族としての地位すら捨てる覚悟がある」

「なんという馬鹿げたことを――」

「馬鹿げているが不可能ではない。前例があるのだ。今から百五十年も前のことだが……」

キイルはアズノエルに奇妙な王室法が制定された経緯を話し、不敵に笑いかける。

「その妾が子を産むのは、ちょうど私が十八となる前なのだそうだ。なにやら運命めいたものを感じはせぬか？」

「キイル殿下……。私は、あなたに約束された輝かしい未来が失われることを望んでなどおりません」

「これはお前のためではなく、私自身のためなのだ。もし、妾の子が女であったならば神に見放されたと思い、私は己の運命を受け入れよう。しかし、私の願いが聞き入れられたなら、神の与えられた奇跡と思い、私はお前を娶るために全力を尽くそう」

怒りからか、恐れからか、アズノエルはわずかに震えていた。キイルはその細い肩を抱き、込み上がるやるせなさを逃すように小さく息を吐いた。

（どれほど愛の言葉を口にしようと、アズノエルにとっては愛の証明にならないのだろうか……）

キイルはアズノエルの耳の後ろに手を差し入れ、長い髪を後ろに梳き上げた。柔らかな長い髪を口元にやり、軽く口づけを落とす。

「少しは喜んでくれないか？　それほどまでに、私はお前を愛しているということなのだから」

「私も殿下を愛しておりますわ。だからこそ、身を引かねばならぬのだと――」

なにも言うなとばかりに、キイルはアズノエルの唇を塞ぐ。唇を開かせ、舌先で歯列をなぞり、柔らかな舌を絡め取る。甘い吐息が漏れると、キイルは細い腰に腕を回し、強く引き寄せた。もっと求めてくれればいいと思いつつも、アズノエルにそれを期待するのは無駄なことであったと気づく。

深く絡み合っていた唇を離し、キイルは少し息の乱れた声でアズノエルに語りかける。

「レイリア妃が亡くなってから一か月あまり経って私が生まれた。兄上は、自分の責務を放棄する言い訳を私の存在に求めたのだ」

「殿下もまた、その責務を投げ出し、別の者に背負わせるおつもりなのですか？」

「別にかまわぬだろう？　オルストン家は貴族と言えど平民と変わらないような家柄だ。そんな家に生まれた者が、ゴースティンにおける最大の栄誉を手に入れることができる。それのなにが――」

「誰もが栄誉をほしがるわけではございません。殿下のなさろうとしていることは、かつてアルト＝ヴィジェ陛下がなされたことと同じではありませんか。ご自分の責務を、生まれたばかりの御子に……。その御子が、いずれ殿下に同じことを思われるようになれば、どうなさるのです」

「そうだな、お前の言うこともももっともだ。ならば私は、その子の補佐に心血を注ごう。臣籍に下ろうとも、兄上のように政を棄てるようなことはせぬ。だから私を信じてくれ」

もっとも愛する者へ誠実であろうとするために、キイルは不実な言葉を口にする。

「お前を娶ることが叶わずとも、私は決して自分の隣に他の女を並ばせはせぬ。……なにがあろうと、私にはお前だけだ」

キイルはアズノエルを妾になどする気はない。それは嘘偽りのない彼の本音であったが、もし正式に立太子されれば、必ず妃を娶らねばならなくなる。その相手は、もうほぼ決まったも同然だった。

他の誰かを妃に迎えたキイルは、アズノエルを妾として手元に留め置くことになるのだろう。兄と同じような道を歩もうとしつつある自分に失望しつつも、もはや綺麗事だけで生きていくつもりもなく、不実な言葉を口にしても良心の呵責など感じはしなかった。

熱を分け合うように指を絡め、己の中の真実に忠実であろうと誓い、ひたすら彼女の愛を乞うた。

……†……

かくして、獅子宮の月、二十三日。

キイルの願望の一つは叶った。

アイリーン・オルストンは男児を出産した。

賭け（後書き）

【補足説明】

獅子宮の月＝八月

手駒

処女宮の月、二日。

キイルの成人の儀とともに、十八の生誕日を祝う夜会が開かれた。

ゴースティンにおいて貴族の成人年齢は男が十七、女が十五であるが、王族は男女ともに十八で、成人の儀の際に称号とともに王領の一部を王より賜る。王女も王子と同様であるが、成人前に嫁ぐ者が多いため称号と王領を賜ることは少なく、また、他家へ嫁ぐ際は王籍とともに一切を返上する必要があり、終生その称号が維持される例はほとんどない。

キイルに授けられた称号は“クラヴィーエ公”で、これまで王弟の中でもっとも年長者に授けられることが多いものであった。クラヴィーエ公を名乗った王族で王太子となった者は幾人かいるが、あの王室法が制定されて後は一度もない。

「クラヴィーエ公殿下、本日は真におめでとうございます」

ハーシェリオン一門の者たちがキイルの周りに群がり、次々に祝いの口上を述べた。

既に多くの公務や政務に携わってきたキイルは、今になって成人扱いされようとなにかが変わるわけでもない。また、今日から呼ばれることになる称号にも特に関心は持てなかった。

もしキイルがあの王室法に則って立太子されるとすれば、その儀式はまた別のものであり、王太子となればクラヴィーエ公という称号で呼ばれなくなるのだ。

現状からすれば、年内にキイルはアルト＝ヴィジェ王の後継として“王太子”となることが宣言されることになる。その際の式典や夜会には外国の要人も多く招待され、その規模も今回の比ではないだろう。

（問題は、いかにその日を先延ばしにできるかだな……）

キイルは控えめに広間を見渡し、目当ての人物を探した。

アズノエルが夜会に出てくることは滅多にないが、今夜はクラウスとともにこの宴に参加している。

ドートリッシュの司祭は半分俗人のようなものであるため、クラウスはいつもの司祭服ではなく、長上着（ジュストコール）に中衣（ヴェスト）、脚衣（キュロット）といった宮廷服に身を包んでいる。

淡い色が良く似合うアズノエルは、藤色（ウィステリア）の絹繻子（サテン）地のドレスをまとい、招待客の貴婦人らと微笑を交わしていた。

その近くの一際華やかな集団にはカレニーナがいる。彼女は鮮やかな赤い髪が良く映える緑色のドレスを身につけ、夫であるエイルバードとともに取り巻きたちと談笑している。

半月前、カレニーナとエイルバードの挙式がガルバンヌ大聖堂にて執り行われた。国内で王族の挙式が行われたのは先王と王太后キャサリーゼ以来のことで、第二王女と伯爵の挙式としては非常に盛大なものとなった。加えて、その祝賀パーティーが挙式から七日間にわたり王宮で開催されたが、それは親馬鹿と揶揄される王の計らいであった。

キイルの生誕祭であるこの夜会は、その祝賀パーティーの数日後に開催されたものである。上等な装いをした宮廷貴族たちの中には、連日の徹夜で疲れ切った顔を、無理やり化粧で隠している者も珍しくなかった。

突然、甲高い歓声が上がり、キイルはその方向に目を馳せる。
兄王が楽団に混じり、得意のベルージャを披露しようとしているところだった。王のこのような振舞いは今夜に限ったことではない。王がまだ王太子であった少年のころから、夜会において奔放な振舞いをすることが常であったという。
楽団の周囲には取り巻きの貴婦人たちが群がり、おもねるような視線を王に投げかけていた。一体、あの中の何人が王の妾であったのだろうかと、キイルは苦笑気味に見つめていた。

王が加わって新たな曲が演奏され始めたころ、キイルの傍に控えていたミシェルがその場を離れた。キイルが侍従から勧められたワイングラスを受け取り、それを口にしようとしたとき、ダラス公アンジェが恭しく姿を見せた。アンジェは柔らかさなど微塵も感じられない峻険な顔立ちをしており、王とよく似た色合いの青い瞳は、常に酷薄さを湛えている。

「ダラス公、そなたも私に祝いの言葉を述べに来たのか？」

「はい、本日は真におめでとうございます。……クラヴィーエ公殿下」

アンジェの威圧的な声で新たな称号を呼ばれても、キイルは不快感を覚えるばかりであった。まるで、終生その名で呼ばれればよいと言いたげに思えた。
アンジェは先王の最初の妃オヴェリアの甥で、王とは従弟に当たる。年齢は王と三つほどしか違わず、幼いころから王と親しくしていたと聞くが、彼らが主従を越えた友人関係にあるなど誰も思っていない。アンジェにとって王はもっとも有用な手駒にすぎないのだ。そんな心裡が彼の言動の端々からにじみ出ている。

「近ごろ、デデュー公は殿下のお妃選びに奔走されているようでございますね。なんでも、ファジールのルイーザ大公女で決まりそうだとか……」

「正式に決まったわけではない。ファジール大公女は単なる妃候補の一人だ。あちらはゴースティン王太子としての私に、娘を嫁がせたいとお考えのようだからな」

琥珀色の発泡ワインの入ったグラスを口に運びながら、キイルはそっけなく答えた。

キイルとアンジェは図らずも目的を同じくしているが、互いにその手を取り合うことはありえない。キイルにとってアンジェとは、有能すぎるがゆえに動かすことのできない駒である。それを苦々しく思う気持ちはキイルの中にあったが、考えるだけ無駄なことと早々に頭の中から追い出した。

広間の右手を見やった後、キイルはアンジェに意味ありげな笑みを向ける。

「幼いころ、私はよく思ったものだ。あの、はねっかえりの姪が女王にでもなれば、さぞや面白いことになったであろうとな」

他国においては、王女や女系王族にも王位継承権を与えている例はある。ゴースティンも王室法を変更して女王を認めてしまえば、カレニーナが王位を継ぐことができた。

ハーシェリオン一門が閣僚や高官の座を独占しつつある昨今においても、アンジェは法務大臣の座に就いており、その役職に留まらない権勢を国政において誇っている。そんなアンジェの権力を最大限に活用すれば、キイルにとっての面白い事態は容易に達成されたことだろう。

エイルバードと腕を組むカレニーナに目をやったアンジェは、探るような視線をキイルに返す。

「そういえば、殿下のお耳に入っておりますか？　アルト＝ヴィジェ王の妾が男子をお産みになられたとか」

「ああ、もちろん聞き及んでいる。これで妾の呪いなどないと証明されたわけだな。……さぞ、そなたにとっては無念であったことだろう。もしアイリーン殿が妃であれば、ギルベイド家の流れを汲む王太子誕生となったのだからな」

キイルが予想通り、アイリーン・オルストンの産んだ王の子について、宮廷において表立って話題に上ることはなかった。

カレニーナの婚儀と祝賀パーティーの最中の出来事であったため、華やかな話題のほうへ多くの者の目が向くのが当然である。そもそも、妾が王の子を産むなど王家にとって醜聞でしかなく、王女の結婚という慶事の真っ只中にあえて出す話ではないのだ。

たとえ産まれたのが男子であろうとも、現段階ではただの私生児であり、オルストンのような下級貴族の者が王家に対し野心を抱くことも考えられない。実際のところ、王は妾との子を認知することはなく、子らは一定の年齢に達すれば修道院に遣られている。先日生まれた子もいずれ同じ運命を辿ると思われている。だからミシェルもこの件に関しては歯牙にもかけていない。

「そうそう、かつてレイリア妃の死産なさった御子は男子であったとか。この度お産まれになった御子には、兄上もなんらかの愛情をお示しになるやもしれぬな」

キイルが薄く笑むと、アンジェはわずかに眉を寄せた。それを見

咎めたキイルはさらに笑みを深く刻み、アンジェに背を向けた。

キイルの弁を、アンジェは嫌みだとでも思っていることだろう。所詮、この男に自分の胸の内などわかるはずがないとキイルは思った。同時に、この世の誰にも理解できるはずがないのだと自嘲した。

正嫡の王弟自ら、妾の子に王位を譲り渡そうと画策しているなど正気の沙汰ではない。しかし、キイルにはそれ以外に有用な手が思いつかなかったのだ。

胸をかきむしるような焦燥は、狂奔する恋情によるものか、それとも喪失への恐怖によるものなのかわからない。ただ、一刻も早くこのような煩わしい感情から解放されたいと願っていた。

……†……

連日の夜会の幕は夜明けとともに下ろされ、その翌々日にはキイルの生活は依然と変わらぬものに戻った。

午前十一時から数時間わたり外国の使臣らと引見を行い、午後三時からは定例の閣議に出席した。そして閣議終了後、キイルは王の私室へと向かっている。閣議の内容を兄王に伝えるのは、五年前よりキイルの務めとなっている。

王の私室のある回廊を曲がると、高く響く弦楽器の音色が聞こえた。兄王がいつものようにベルージャを奏でているのだろう。

政治に無関心である王は、楽器の演奏や観劇、茶会などに興じることで一日を過ごす。その甲斐あってか、王のベルージャの腕前は卓越しており、一流の楽師と比べてもなんら遜色を取らないものと

なっていた。
それまで滑らかに奏でられていた弦の音が、時折途絶え始める。キイルは不審に思いながらも侍従の案内で奥の間にまで進んだ。
長椅子に腰かけた兄王は、ベルージャを脇に抱え、羽ペンを手に取った。円卓には五線譜が数枚散らばっており、今は練習をしていたわけではなく作曲をしていたのだと知る。
かまわず、キイルは兄王に呼びかける。

「兄上、午後の閣議決定の報告でございますが……」

「ああ、そんなものはよい」

五線譜の上に滑らかに音符を描いていく。羽ペンを持つ手を止めることもなく、柔らかな声で答える。

「そのようなものを報告されても、余には理解できぬのでな」

キイルは唖然としたが、そんな呆れも次第に怒りへと変貌していく。

「それはつまり、今後も報告は不要であるということでしょうか？」

明らかに非難の色を漂わせる声色であったにもかかわらず、王はまるで気にかけることはなく、もう一度ベルージャを抱え直した。

ベルージャはファジールの西に位置するルザーリという国から二百年ほど前にゴースティンに持ち込まれた。六つの弦を持つこの楽器は、元はもっと低い音色であったが、ゴースティンに渡ってから何度も改良され、荘厳で高い音色を奏でるものとなった。夜会だけでなく、教会堂における礼拝の際にも用いられる代表的な楽器であ

る。

ゆったりとした旋律が室内に響き渡る。当然だが、キイルには聴いたことのない曲であった。演奏だけでなく作曲の才能もあるのだと思えるほど、心を癒してくれそうな繊細な旋律を王の指が弾き出している。

しかし、今このような音色を聴いても、キイルの心はささくれ立つばかりである。そんなキイルの傷にさらに爪を立てるのは、兄王の無神経な言葉であった。

「余もそなたのように政治の才に恵まれておればな」

キイルは、手にしていた報告書の束を深い皺が寄るほど強く握りしめ、努めて冷静な声を返す。

「失礼ながら兄上、このようなことは才能などというものではないかと存じます」

「そういうことを言っておるのではない」

兄王が軽薄な言葉を紡ぐごとに、弾き出される音色が一層高く鳴る。

「人の上に立つ者の器量と言おうか……。ともかく余は、昔から王には向かぬと多くの者たちから言われてきたのだ。余のあまりの不甲斐なさに父上も困っておられてな、母上が亡くなられて十五年も経ってお前の母を後添いとしたのも、先を憂えるお気持ちがあったからであろう。お前が生まれたとき、父上はたいそうお喜びであった」

「でしたら、兄上も新たな妃を娶られてはいかがです？」

思わず、キイルから冷やかな声が放たれた。王はそれに驚いたのか、ベルージャを奏でる指を不自然に止めた。

兄に対して、ましてや王に対してならば、あまりに失礼な態度であった。だというのに、王はキイルに向けてゆったりと微笑んだ。そんな兄王のなよやかで優雅な眼差しは、キイルの苛立ちすら呑み込み、その心を酷く揺さぶった。

悲しみと困惑を含んだ、慈愛に溢れてさえ見える青い瞳……。兄の秀麗な顔があまりにも優しい色合いを浮かべるとき、キイルはいたたまれなくなる。王であり、親ほど年の離れた兄でもある人物と対峙しているというのに、なぜ、無抵抗の人間を前にしているかのような気分にさせられるのか、と。

「余は、早くお前が王になればよいと思っている。ケーニヒス王のように、譲位ができればよいのだがな」

「国王の譲位が可能となるよう王室法を変えるように言ったところで、あの法務大臣は聞き入れそうにもありませんがね」

「仕方あるまい。アンジェは王家にとって忠実な家臣ではないのだから。あれが余に仕えておるのも、ギルベイドの流れを汲む王であるからというだけのこと。裏を返せば、お前に辛く当たるのも――」

「王太后を宮廷から追い出したのも、ハーシェリオン家出身の妃であったからでしたね」

キイルはすげなくそう言い放った。

父を論(あげつら)うことに抵抗はあったが、ギルベイドとハーシェリオンから妃を娶ることに同意したのは王として失策もいいところだと思っ

ていた。あの二つの権門は、王女の降嫁先にならばまだしも、妃を娶る家柄ではない。己の存在を否定することになるが、母キャサリーゼとは子をなすべきではなかった。既に結婚した王太子がいた以上、余計な火種を持ち込みかねなかったのだから。

そして、もし自分がいなければ兄は王としての責務を放り出さなかったのではないか、ともキイルは考えていた。

「王としての責務を果たされたいというのであれば、せめて兄上にしかできぬことに目を向けられてはどうでしょう？　いくら才能に恵まれていようと、芸術にばかり打ち込むなど、ゴースティン王のされることではありませんので」

兄王はその一言には堪えたようで、思案の末、重いため息を吐いた。

「新たな妃、か……。正直なところ、これまでまったく再婚を考えなかったわけではないのだ。お前の立場を危うくするのではないかと思えば、二の足を踏んでしまってな。そうだな、お前が正式に余の後継となった後ならば、妃を娶ると約束しよう」

「まさか、兄上には誰かお心に決めた方がおられたのですか？」

弟への気遣いを放蕩生活の言い訳にされた気がして、キイルは少々気を悪くした。しかし、あれほど頑なに再婚を拒み、貴婦人たちを使い捨ててきた王に誰か想う人がいるということには驚きを隠せなかった。

キイルの立太子後に、という条件は気に入らないものの、これはキイルにとって光明が差したかに思える流れであった。しかるべき身分の女性ならば、下級貴族の妾を妃に据え、私生児を王太子にするよりもよほど正攻法である。廷臣らの余計な批判に晒されること

もないだろう。

「兄上、なぜそのことを言ってくださらなかったのですか。そもそも、私にはそのような気遣いは無用です。私は、なにも王になりたかったわけではないのですから……」

キイルがそう告げたとき、兄王は薄く笑った。それは今までキイルが目にしたことのない、どこか冷やかさを孕んでいるものだった。

手駒（後書き）

【補足説明】

処女宮の月＝九月

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4114s/

いつかあの場所で

2011年11月22日02時00分発行